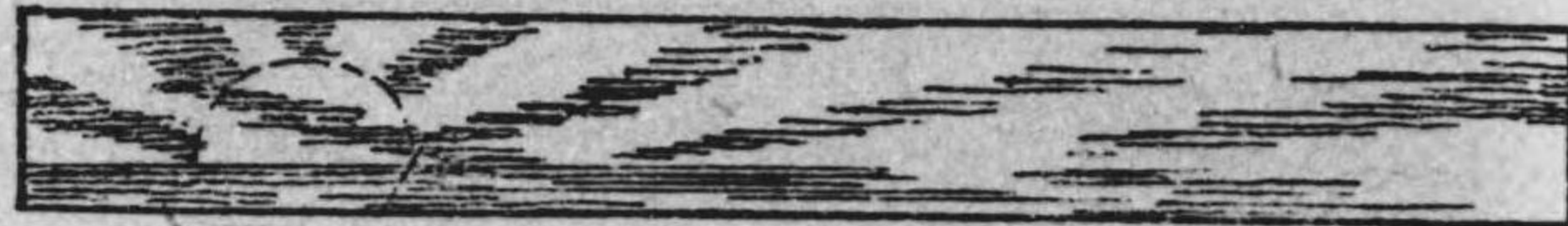




一日一訓を守れ

あつた、秀吉熟々思案して、彼よも徒に負債を生じて罪に陥
ことはあるまい。定めて理由のある事ならんと、檢使を遣はし
其江州の居住の體や京都の旅宅の風を詳に點檢せしめたるに
居室に美を盡くせる所無く、失遊の備へ無く、専ら武具用具を
準備し、之に公儀の用物たる印しの紋を付け、不意に秀吉が江
州に於て事あらうとも、武具に事欠けぬ様に計つてあつた。猶
且つ地下の引込みたる豪傑共を配下に養ひ、常に武備の思入を
深くし、聊も玩器遊宴の風が無い。此代官は食祿至つて少くし
て、其支配する所甚だ大であるから、家人を數多持たざれば
事叶ふべからざる事情が明白となつた。茲に於て秀吉大に耻ぢ
て、此代官を招き「此頃汝に不審を蒙らせしこと誤りなり」と



述べて代官の負債を悉く免じ、其の祿を大に増加して、以て其
志及び其仕様を厚く賞美されたと云ふ。
凡て天下の法令を制定し、禁制停止の旨を出すこと、能く人
情を計りて其理を究め、而して後に是が嚴法を設くべきである
法を犯す輩は糾明を詳かにし、日を経て決斷すべくさしか、り
て心のまゝに制せば後の誤りとなる。主たる者鑑みる所なくし
て可ならんやである。

六月二十八日

正しからざれば大なる能はず。(ラムブラー)

經典中に、倒器、覆器、穢器と云ふ語があるが、倒器とは字

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

の通り倒れて居る器、穢器とは汚れたる器、覆器とは蓋をして
在る器、即ち吾々を器物に喩へて言はれたので、一本の徳利で
もさうである。若し是れが倒れて居るのに中へ酒を注ぎ込まう
としても、それは出来ない。同時に穢れたる器、塵埃だらけの
汚い器の中へは、矢張り清き水や、うまい酒を注ぐ事が出来ぬ
又覆器で丁度鍋釜のやうに、蓋がしてあつては中へ何物をも入
れる事は出来ぬと、斯う云ふ喩を以て諭された語である。
我が學問であるとか、我が理窟であるとか、我が財産である
とか、地位であるとか名譽であるとか、又は我は斯う云ふ貧弱
な者であるとか、我は斯う云ふ數にも入らぬ者であるとか云ふ
て自分自ら我が心に蓋をして居る様な場合が多い。されば左様



いう器には大なる修養の水を盛る事も出来ない。故にさう云う
穢れたものは悉つかり清めて、其の蓋を取り去り、倒れて居る
ものは之を起して、而して始めて修養を求めなければならぬ。
斯くして平心坦懐にして修養の門に入るべきである。之れ即ち
正しからざれば大なる能はざるの所以である。

六月二十九日

機敏ならざる人は、常に厄難と戦はざるを得ず。

(ヘシナツド)

機會を捉へて勢に乗じ、自己の進境を敏に計るとは決して
世人の誤解するが如き害毒的意義を有せず、危険的分子を有せ
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

ざるものにして冷靜以て之を観察すれば精力活動の一法である
ことを知るべし、然かも之を同時に青年をして機慧敏活に出づ
るの道を悟らしめ、勞を以て逸を制するの工夫を立てしめ、逆
境の中にも一大光明を點じ、敗を轉じて福となすべき周到、緻
密の思想を誘起せしめ、奮闘努力して常に厄難の征服者たらし
めんとするのである。

六月三十日

機會は發見する毎に之れを捉へざるべからず。

(ペーコン)

一度好機を失することあらんには、假令再び之れを捉へ得る



ことあるにせよ、一年二年は容易に經過し後年に至りて、自己
の行爲の愚昧、失策の甚だしきに至れるを見て、却つて自ら驚
異の念を發するに過ぎないのである。之を播種に喩へて言はん
に、善良なる時機を擇みて種子を蒔くことを忘れたらんには如
何なる時ありてか萌芽を見るに至るべきか否此の播種上の適當
なる時を逸することあらんには、青緑滴るが如き野菜の成熟
を見ること能はざるべし、従つて自己の食膳に美味を上すこと
能はざらしむるものである。人生の機會も猶此の如きもので、
最大にして且つ最良の機會を捉へんと欲するならば、機に至る
と同時に活用し、之れをして自己立脚の基礎たらしむべく努力
すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月一日

汝もし自らの爲めに生きんと欲せば、須らく人の爲めに生活せざるべからず。
(セネカ)

例に依りて本月は、官私諸大學に卒業式を舉行して、學校生活より社會生活に移らんとする新進氣鋭の諸士、數千名を世に紹介するのである。社會は云ふまでもなく、時々刻々新陳代謝する者であるから、益々新人物の出でて、新活動を敢てすることに切望して已まぬのである。社會の盛衰は、これ等新人の舊人に優れりや、或は劣れるか、この一に因つて決するものである。要は新人の大に奮起を疾呼するのである。



七月二日

此一事、我之を爲さん。

(ボロー)

人の熱誠は同事に二事以上に注ぎ得べからざるものである。思想する處の腦髓も一つにして動作する處の體軀も一つである人は到底一時に二事を爲し得べきものではない。決して多數の事を爲さんと欲するものでない。其望む處の一事にして大きかつたときは一生を擧げて其一事を盡すも可である。其望む所の事が若し小事であれば、先づ其一事を爲し遂げて後他の事に移るべきである。若し多數の事に着手せずして一事を成功したるものに劣るので、總べて現在の一事を成功せざる中は、他の事

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 眼を轉ずることは不可である。此くの如きは事を爲すの少なきが如くにして、却つて事を爲すの多いものである。

七月三日

我等の受くる片刻の苦は極めて大なる窮りなき重き譽を我等に得せしむるなり。
 (ポーロー)

貧困は人生の大敵なり、故に貧困は人をして廉恥の徳性を失はしめ、判断の智能を失はしむるばかりでなく、動もすれば人をして自ら其の身を殺さしむるに至るのである。何ぞ其素志を曲げ其計畫を擲つが如きに止まるものでない。然れども、此等は畢竟する其の精神の懦弱より生ずるものであることを記憶せ



ねばならぬ。貧困の苦痛を語るもの多しと思ふても、貧困の極路傍に飢死するものは甚だ其數少ないではないか、又古より偉人傑士の多くは貧困の苦痛と戦ひたるの人々である。

七月四日

汝の鞭を愛せよ。

(ジョンソン)

彫刻師の手に在る石を視るも、諸士は思ひ半ばに過ぐるならずや、玄翁にて打ち割られ鑿にて穿たれ、砥石にて磨り巻くらる、時は嘸ぞ苦痛なるべし。然れども彫刻師の手に上りたる石は石の中に於て幸福なる石に非ずや、若し彼等細工場の石材たらずんば永く山に在りて人の眼にも懸るべきにあらず、彫刻師

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 斬り磨かれたる爲めに、英雄の記念碑ともなり、貴人床上の花瓶ともなれば、學者机上の硯ともなりて珍重せらる、人間の璞たる野生の者が玉となりて光を發するには忌とも玉人の琢磨を埃ざるべからず。

七月五日

徳性は芳香の如し、之れを焚き之を碎けば益々其香芥を發す。
 (ペーコン)

天の人を逆境に陥すは大器を爲さしむるの準備を全ふせしむるものである。然るに人の逆境に在るもの好んで自暴自棄の境界に轉移する所以のものを見るに全く天意を理解する能はざる



に依るが如し、是れ豈試験の嚴酷を避けて自ら欠席して落第するの安きを選ぶが如きものならずや、況んや逆境は不幸の地位なりと雖も之に居るが故に却つて功名を博し得らるゝことがあるではないか。人の仁義忠孝勇氣節操は殊に逆境に在つて其光りいよく高く、其の香芥を發するものである。

七月六日

發心正しからざれば萬行むなしく施す。

(佛典)

自己を眞に解せずして萬行全きを得ないのである。何事を爲すにも、第一最初の根本、踏み出しが大切である。眞に自己を一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

知ると知らざるは、一事一業の成功に多大の關係を有するものなれば、眞に自己を知り、發心を正しふして萬般を處理し以て功を收められんことを常に忘れべからず。

七月七日

過つて則ち改むるに憚ることなかれ。

(孔子)

戰國時代の武將、堀左衛門督秀政は越前の北莊城主なりしが日頃家中の諸士や、百姓町人に對して、不當なる處置が多かつたのであるが、或日、城下に「左衛門督殿怪しき仕置の條々」と書いた大札を立て、二十三ヶ條を記るしてあつた。之を目附



出頭人が發見して、早々秀政に示し、後日の懲戒もあることなれば吃度詮義し、法度を嚴にし給へと申上げた處、秀政は熟々と其の札を眺めて居たが、突然立ちて俄に袴を着け、盥嗽して座に返り、其の札を取り三度押し戴き「今誰あつてか予に斯くまでの諫言をなすものが、之は必ず天の興へ給ふ所である。永く我が家の重寶たらしむべし」と云ひ敢えて之れを問はず、後改めて仁政を布けりと。されば世人も舉つて其の善政に懐くに至つたと云ふ。是れ智者の心溜滯なきは流水の如きものあるを語るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月八日

人見て法説け。

(日本古諺)

天下の事物は、悉く實相を表面に現はして居るものばかりでなく、反つて多くは假相を現はし、裏面は之れに反對をして居るものである、例へば笑ふて居る者は大抵は喜んで居り、怒つて居る者は大抵怒つて居るのであるけれども、又必ずしもさうでないものもある。即ち笑ふて居つても、心では之を悦ばず、又罵つて居つても心には喜んで居るものもある。之は場合に依り事柄によるのであるが、通常一般の人は、其の表面に現はれたる所だけを視て判断を下し推測をする所より、大に過誤を生ず



るものである。人見て法説けの語は卑近なりと雖も、此の意味を充分に察知して人に接し、事物の内外表裏の真相を観察するに誤らざることを期すべしである。

七月九日

沽らん哉沽らん哉我は價を待つ者也。

(孔子)

吾人は餘り自己の智能を早く人に賣つて己の位置を得やうとか、或は名望を得やうとか云ふ事になると、却つて幾分か其の人格を害すると思ふが、儒教の主義の前提の言にしても、此方から價を求むるとは言はなかつた、我々に此の間に面白い真理があると思ふ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

價を求むると云ふ事になると、動もすればハイカラ的になつて人から厭がられる、賣るべき覺悟を持つて社會人道のために己の學んだことを實行して、己をも社會をも益すると云ふ充分の人格を備へて眞面目に其の學問智識を應用することが大事である、即ち我々は價を待つと云ふ事が大事で價を求むると云ふやうになつては人格を幾分か傷ける様になることを忘れてはならぬ。

七月十日

道徳は萬劫不壞の故郷なり。

(中江藤樹)

藤樹先生嘗て立志に關する和歌を詠じて子弟の箴とした、曰



く「故郷へ歸へる心の如何なれば、久しく旅に年をふりつ、」
と、且つ自ら註を下して曰く、

「故郷の人が未だ郷に至らざる時は、難に遭ひて愈歸思多し、一息尙存する中は、此心止むこと能はざれば、百年の故郷する斯の如し、況んや。道徳は萬劫不壞の故郷なるをや」
と、以て青年立志の箴言と爲すべきである。

七月十一日

親死ね子死ね孫死ね。

(仙崖禪師)

仙崖禪師或る時黒田家に結婚式があつた時に祝賀の爲めに贈つたものである前提の言は、慶事の行はれたる際の書としては一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

何うも頗る面白からざる言であるが、成程、何方も死ぬに違ひないけれども、所謂天地の大方と云ふか、天則に従つて按配よく死んで行き、順序よく新陳代謝して行く處に大變面白味がある。御目出度いことがある。所が逆行して逆さま事が世の中に多い、身の上には始終逆さま事が來るとすると、是は大いにお目出度くない事になる。例へば親の頼みとして居る所は子にある其子は又孫を頼みとして居る、家庭に於ても、之れが誠にお目出度い事なので、それが順々に其の事業を継ぎ、其の志を紹んで行く、人の身體は幾度か潜るけれども、祖先の志は子々孫々に傳へられる。されば吾人も禪師の語に反せざらんことを期すべきである。

七月十二日

天才と凡人とは、其の間、相距ること僅に一步のみ。たゞ是れ奮闘と精勤とに堪ふるや否やに在るのみ。

(ヴォルテール)

奮闘の力が、偉人に必須缺くべからざるは、明かな事實であるが、さて又この奮闘の精神をして一層強大ならしむるには、茲に強固なる意志の存在が必要である。苟も混沌たる世路に一步を踏み入れ、一事一業を完成して、功を收めんとするには、途上に横はる幾多の障害を越へねばならぬ。而して其の障害物を越すには何うしても強固なる意志を要するのである。然り天

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
才たり、凡人たるも蓋し強固なる意志に依る奮闘努力の如何に
因るのである。

七月十三日

汝進退維谷まるの時に際し一分一秒と雖も最早汝の地を保
つ能はざるに至るも猶其地位を捨つる勿れ。斯かる時こそ
運命轉換すべき時なり。

(スウト)

一年の中にも和風駘蕩の春あり、三伏鏢金の夏あり、神氣清
澄の秋あり、又嚴寒徹骨の冬もある。人間の運も恰も斯くの如
きもので、豊幸と不幸との一方に偏することあらむやである。
故に古より歡樂極まつて哀情多しと願ふ如くにして、唯其の極



まらずして悲しむ者は益々悲しみ、歡ぶものは愈々歡ぶのみで
あるが、悲觀全く其極に達して立ちに其の地位を替ふるもので
ある。恰も盛暑にして一葉の落るを見、極冬にして梅花の開く
を見ると同一にして、吾人は逆境の隣に順境あり、苦闘の次頁
に成功あるを忘るべからずである。

七月十四日

時間は最大の改革家なり。

(ペーコン)

オーステルリッツに塙軍を紛碎せるナポレオンは、左右の將
官に謂つて曰はく「塙軍は最後の五分間に於て敗れたるなり」
と、最後の五分間、此の五分間は貴重である。總ての勝敗は此
一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 五分間を忍ぶと忍ばざるとに依つて人物の優劣を異にし、或は其の地を轉せしむるに至るのである。然り最後の五分間は吾人の爲めの改革家である。

七月十五日

尺の壁を貴ばずして寸の陰を貴ぶ。
 (文中子)
 人生の短きは之を蜉蝣の一身に譬へ、或は須要の時間に比するるのである。然れども人間の生命は黄金百萬圓を積むと雖も猶之に替ゆることが出来ないものとせば、其の生存中の一分一秒と雖も其の價値の重大なるは、尙算することが出来ない程ではないか。然るに人は其の生命の短少なるを知らぬのではないが



其の生存中の一分一秒の如何なる價値あるを知らずして、之を空費して恬として顧みざる如きは實に驕者も亦太甚しいことである。寸陰を惜しむでこそ時を利するの最善ではないか。

七月十六日

業は精しきこと能はざるを憂へよ、有司の明かならざるを患ふる勿れ、業は成ること能はざるを患へよ、有司の公ならざることを患うる勿れ。
 (韓退之)

青年諸士に在りては只だ學徳の修まらざるを患へて先輩が世活をせざることを患へてはならぬ、其の人の満足は自ら顧みて自己が價値ある人間たるを自覺したならば之れに越したる満足

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

はないのである。何となれば任所未だ定まらざるも適材として
の目的は既に達したからである。若し夫れ適材にあらざる人物
であつたならば、其の器に非ずして其の地位を得ば其の任に堪
へざる不安の心は苦痛謂ふべからず、されば却つて位置の爲め
に咄はれ肩書の重荷に堪へざるよりは寧ろ無官の太夫にして自
ら慰むるの人となるが遙かに幸福であらうと信ずる。

七月十七日

人の疝氣を頭痛に病み

(日本俚諺)



薄志行な、青年が煩悶病に罹る杯は、畢竟は取越苦勞に出
づるもので、見越輸入的に青年時に必要もなき、大人の考へや
老人の氣苦勢を脊負はんとするが故に、脊負い切れずして、懊
惱煩悶に陥るのであらう。入らざる念慮である、人の多くは明
日の事を思ふから愚痴となるものである。然るに未だ具足羽も
生へざる癖に、天下國家の前途を悲觀したり、宇宙の事解すべ
からず杯と、人間世界の權限外にまで立ち至つて、他人の疝氣
を頭痛に病み、猿猴が月を淵の底に搜りても得られずして、藻
掻き苦むとは其の愚なるや實に及ぶべからずである。要は空想
に捕はれずして健實なる立場を作るべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月十八日

權花一朝の榮

(日本俚諺)

偶然の僥倖により假令一時は成金となるとも、元來自己修の
効果にあらざれば其基礎極て危く、世間に信用なく、勢力はな
いのである。只現在の成金で自己を支るに過ぎざるを以て、權
花一朝の榮にも譬ふべし、一朝事業に失敗するときは終生恢復
の期なく、所謂元の木阿彌になるべし、之に反して結果を豫期
したる成功者は一行一動皆自己の自信と力とによりて成功した
るものなれば、一時の僥倖にあらざれば其の成功は其人自身の
價値にて、物質上の欠虧來ればとて、其の人の價値の減殺する
ことはないからである。



七月十九日

子が可愛くは棒を喰はせよ、子が憎くばよきものを着せて
美食を喰はせよ。

(大公望)

ネルソン、ノルスワルサム學校に在りし時、父の安否を訪ひ
學校に歸らんと兄と共に、馬に騎つて出たが、雪深くして路通
せず、止むを得ず半途にして歸つて、此事を父に告げた、父は
「路通せずとも、明日の課程を缺く事は宜しくない、之に堪ふ
る事の出来ぬは、汝等兄弟の不面目である。」と云つた、兄弟は
此の一言に鞭撻せられて、直ちに北風膚を刺し、馬も進みかね
たる大吹雪を冒して學校に歸つたのである。此の親にして此の
子ありの活訓なるべし。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月二十日

一般の習慣に従ふべし、一般の愚に従ふべからず。

(英國俚諺)

貧に處して心を安んじ、自ら貧境を脱退せずなど云ふは、如何にも心は清き聖人らしく詩歌に誦まれたもの多し、されどこれは甚だしき量見違ひであらう。

假りに、成功者に風流を娛むの資格なくば、風流韻事は、穢くろしきものなり、風流韻事は詩人歌客の専有物ならば、人間の審美、妙致は宇内の妙致は一部民の玩弄物ならずや、審美は人間の審美、妙致は宇内の妙致である。之れを娛むと娛まざるとは一般の習慣に左右すべきで一般の愚に従ふべきではない。



七月二十一日

大事は殆ど凡て少年の爲す所たり。

(ピーコンス、フィルド)

青年は悉く富人なり、何に富むかと云へば即ち春秋の富むなり、春秋の富みたるは金銀貨材の富に勝ることは萬々である。されば青年は老後の富人が買得べからぬ富を持てるものにして、其の大資本は悠々春海の如き未來に在る、活潑々地なる其の精神意氣に在る、この大なる富を懐きながら、老衰せる世の富人輩を羨むとは實に腑甲輩なき次第ではないか、將來に於ける大事業は悉く諸士の手待つのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月二十二日

和順中に積みて、美華外に發す。

(禮記)

家族主義は如何に我國の國風とは云へ、世間と交る時には社交的の人となるを要するのである。何處にても家族主義を推し通して親類血族の外は敵國觀を以て方寸の意志を打明けさすとするが如きは、時代知らずの人と擯斥せらるゝ運命に陥るものである、故に和順中に積みて、人と馴染好き人となりて、淡泊を以て人に接し、而して立身出世の活路を見出すべきである。



七月二十三日

人事には潮汐あり、その満潮に乗ずれば幸運に達す。

(シエクスピア)

機會を捕ふるものは決して寝て居ない、必ず自ら脚を出して身を躍し手を差し伸べて勇奮力戰する、一度捕へた機會は更に第二の機會となる、彼等は捕へた機會を以て第二の機會を造るのである。假令ば、山を買ふて樹木を斬る、其木材で船を作り更に前途に向つて進發するようなものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月二十四日

運は天にあり、又人にあり。

(古 諺)

人生の成敗及其度合は、全く運のみに依頼する人と、運の分量と努力忍耐の分量との均衡如何に依つて決せらるゝものである。運のみに依つて起ちたる人は瞬く間に傾覆し、運の分量多きものは多き程其の運命を短縮する、故に人間は結局運を獲たならば直ちに努力忍耐の掌中に入れて、自己の思ふまゝに驅駛するの準備なかるべからずである、運は天にもあり人にも亦あるものなれば、要は其の運を努力と忍耐とに依りて哺育せしめ、運たらしむるこそ吾人の本務である。



七月二十五日

悪人は非を飾るも、善人は之を改む。

(ジョンソン)

質朴と云ふことは、衣服に於ても、言語に於ても、何れに於ても之を發見することが出来るのである。人に物を云ふに餘り多くお世辭を云はぬほうが宜い、適度にすることを忘れると終には精神が空虚になる、心も卑しくなるものなれば、可及的言語に於ても虚飾を避け、素朴にして人を欺かざることを期すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月二十六日

鏡は婦人の最上の顧問なり。

(獨逸俚諺)

佐久間象山は常に懷中に一小鏡を忍ばせて居た、若し人が、
偶々浮説、無實の言辭等を弄する者ある時は、其の小鏡を懷中
より取り出し、其人の面前にムツと突き付けて曰く「アーお前
の面を見よ」と、以て其の人々を反省せしめたとの事である。
鏡を以て最上の顧問たらしむるは獨り婦人のみならずして、却
つて現下の有髯男子に其要多々なるを認むるのである。



七月二十七日

小さき斧も屢撃てば最も堅き樫を倒す。

(ンエクスピア)

凡ての事は刻苦と努力に因つて大成するものである。凡人如
何に刻苦努力するも、天才者の職には達すること能はざるべ
れども、天才者とても刻苦努力して、始めてよく其の才を發揮
し得るものである。天才の資ある者と雖も、刻苦努力せざれば
凡備と撰ぶ所なかるべく、之れに反して凡人たりとも刻苦努力
すれば、遂には天才者の壘を摩すことが出来るものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月二十八日

悪事千里を走る。

(日本俚諺)

悪徳の反響が波及することは、今日に於てはなかく千里所に非ず。人の行爲は善悪共に其の一人に止まらず弘く他に感化を及ぼすものなれば吾人は一層善行に勵み、非行を慎む公徳心がなければならぬ。



七月二十九日

燈臺下暗し。

(日本俚諺)

機會は遠隔の地に求めずとも、近く自己の脚下にあるを知らざるもの多きは眞に嘆すべきの至りである。「燈臺下暗し」の一語は確かに之を證するに足るものである。吾人にして少く眼を高所に着けて自己の一身を活躍せしむべきの機あるを見たならば、容易に之を求め得らるゝのである。此の如きは一に吾人の思想行使の方法如何に在るものであることを忘れてはならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

七月三十日

何れの所にあるも又何れの時にあるも悉く自己の精力の權化として之を利用することを力め、寸毫たりとも之を散逸せしむるが如き愚を演ずべからず。(ゲーテ)

前方を顧慮することなかれ、後方に就て心を煩はすことなかれ、只自己の手許にあるものをして之を失ふことなく之を保有して永久に其生長と發達を期待せざるべからず、斯くありてこそ眞個に吾人の意志の健全にして、且つ事業に對する熱心の充實せられて、最後の成功を見るに足るのである。



七月三十一日

機會は躊躇すれば、多く之れを失ふ。

(バプリアスザイラス)

古へ周公は士を迎ふるに急にして食するに三度哺を吐き髪を理するに三び梳りしと云ふに非ずや。豊公は、牧の敗を聞いて茶會の席より出陣したるにあらずや、機を失はざらんことを勉むるものは時を惜しむ、と斯くの如きものにして、時間を空費して機會を俟つと云ふものは、恰も百年河清を俟つの徒と等しきものであると云はざるを得ない。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月一日

致富の道は平坦にして市を行くが如し、唯二事の注意すべ

(英國古諺)

きものあり勤勉と節儉とこれ。才智に誇る勿れ、學識に誇る勿れ、技藝に誇る勿れ、此等に誇るものは自ら前途に一種の幻影を描いで、昇然として高く尋常人の上に標置するものである。故に彼れ等は其冀望を満足せしむる處のものに非ずんば働かんとするの念なく、されば貧窮の生計を營みながら更に節儉を守らんとするの意はないのである。彼等にして富を致さるものは必竟するに之が爲めである。記臆せよ青年諸士、致富の門は賢愚無差別である。唯勤勉と節儉とを守るものを容るのみで、才子、學者、技士たるに依つて通行の特權を有すると思ふものは誤つて居るものである。彼等富豪の一生の行狀は唯是れ勤勉と節儉の二事の結晶なるを知らねばならぬ。



八月二日

人、一志を以て萬事を爲し得べし。(自助論)

自ら「俺は不可ない。眞に意氣地なしだ」と心付きたれば、何故それを轉換して頑強なる意志とならぬのであらうか。人、一死を以て萬事を爲し得べしと云ふではないか。意志の弱きに氣付かば、奮つて牢乎として抜くべからざる底の意志となすに努めぬか、若し三度にして成らずば、五度六度之を努めて、薄志を打破し、以て強固なる意志とは爲ぬか。萬難に對抗し之を征服してこそ光輝ある成功に見ゆることが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月三日

君子は其獨りを慎む。

(中庸)

凡そ物體上には、隱あり顯あり、龜あり細あり、大あり小ありであるけれども、その精神上、即ち道德の上には、隱顯、微見、大小、長短はない。是を以て微として顯ならざるなく、隱として見はれざるはないのである。さればこそ「君子は其獨りを慎む」と云はれた。然れども、この「獨り」は實に大切なる處にて、大道に體達せる君子は行ひに裏表なく、隱微なく龜細なく、自もなく他もなく、人我以上の唯我獨尊にして即ち絶體無我の境涯でなければならぬのである。



八月四日

危を知り而して常に備を設く。

(易)

自己内心の賊は常に付け規つて居る、瞬時も油断をすれば敵は直ちに、其の間に乗じて跋扈するのである。我々は兎角咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝの癖があつて、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの大和魂も、兎もすれば平素は暖衣飽食の徒と成り易い、故に「常に備を設く」で、小心翼翼として平常に於て大事に處するの覺悟を養つて居らねばならぬ。從晝子夜、寸時も身を離れぬ所の實際活社會に處するの修養がなくてはならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月五日

勇氣なくんば信なし、信なくむば、諸地の徳は皆あらざるなり。

(スコット)

信念の薄弱なるものは、我家の門を出で、も半途にして退いて了ふ。稍強固なるものになると敵陣に入り交戦幾回、終に彼我共に倒る、迄戦闘を續ける、乍併、眞の勇者は難なく敵を破つて凱歌を奏するに至るのである。



八月六日

謹慎戒懼こそ眞正の勇氣なれ。

(イウクピテス)

大阪方武將中の木村長門守重成、弱冠の頃、茶道の某と口論の末、某は怒つて重成の頭を扇子にて打ちければ、其の烏帽子を落しけるに、當時重成は毫も怒らず平然として笑ふて曰く、「吾は武士なり、此の事を捨て置くべきにあらず、宜しく汝の一命を申受くる筈であるが、汝を殺さば吾れも亦死なん。されば吾が命は汝如きものと交換する程の安いものではない、いざ君の一大事と云ふ時に、御用に立つべき大切な生命である。それ故に今は許して置くから必ず忘るゝな」と云つて一笑に付して之を顧みなかつた。實に忠臣とは君國あるを知つて私の在るを知らぬものにしてはじめて云ひ得べき稱呼である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月七日

汝の鞭を愛せよ。

(英古諺)

文豪サミュエル、ジョンソンは幼時より學を好み、日夜讀書に餘念なかりしに、其の教師某は彼に苛鞭を與ふこと屢々なりしかれども其の笞杖を受くるば即ち未だ吾れの及ばざるが爲めなりと惟ひ、鞭たる、毎に發憤研學に勉めければ、流石、狂暴の教師も遂に鞭を下すに由なからしめたとのことである。君子は他人を責めずして先づ自ら戒む、彼の君子、傑人たるの素朴は其の苛鞭を愛したるに起因するのである。



八月八日

艱難に優れる教育なし。

(ピーマンズ、ファイルド)

荻生徂徠、研學を積むこと十三年間、有らゆる艱苦窮患と戦ひ、年二十五歳の時、江戸芝浦に私塾を開き、其の餘暇を以て群籍を涉獵し、終に一家の學を唱ふるに至つたのである。されば幾くもなく柳澤侯の知る所となつて、後には將軍綱吉公に愛せられ、當時海内無双の榮譽を受くるに至つたのである。これ皆少時より艱難と戦ひて立志奮勵を味方となして、これを打破したるに他ないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月九日

迹を踐ます亦室に入らず。

(孔子)

子張或る時、孔子に「善人とは如何なる人を云ふか」と問はれた、孔子之に答へて曰く「迹を踐ます亦室に入らず」と、即ち釋迦、孔子、基督等、凡べての聖賢の教を踐ますして、天性の氣性は務めずして不義不正をせぬ人である。然れどもかゝる人でも更に修養せざれば室に入らず、即ち人格の奥座敷へは進むこと出来ずして、發展的向上すること能はずと言はれた事は、大に吾人青年の服膺すべき金言である。



八月十日

素を見し撲を抱く即ち素撲

(老子)

素とは白いと云ふことであるが、白の字とは違ふ、白の字は人工的に白で、素の字はもと生絲より出たる言にして人工を加へずして、自然に白いのである。又撲とは山林より伐出した儘の材木にして、是亦少しも人工を加へてないものを云ふ、この天然白き生絲、この天然良質なる木材も、職工の力を加へて更に其の價値を増大するのである。然らば天性美質を供有する人格者において、自省して修養するの緊要なるは論を俟たざる所である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月十一日

古へより今に至る迄、非常の功績を成すの人を見るに、其の天賦の才能或は中等に過ぎざれども、盡く心思氣力の強毅なる人にあらざるはなし。
(スマイルス)

人は其の志を立つること大にして、而も剛毅であつたならば、假令其の天賦の才氣は通常であつても、必ず遂に一事業を成就することが出来るのである。これは専心其事に従うて、よく其効果を蓄積するからである、されば平凡の才氣を備ふる者でも、決して自卑自屈することなく、先づ志を立つること大であつて、而も剛毅を以て、之を一貫することを期すべきである。



八月十二日

志は大ならんことを欲し、行は小ならんことを欲す。
(古 諺)

總ての事業は、一朝一夕に成るものでなく、諸種の經歷を有して居るのであるから、之を巧みに處理するには、其の原因を探り、結果を見定め、且つ本末表裏をも考へて、加之も十分周密なる注意を拂ふて之を経営すべきである。所が兎角人は遠大の希望ある者は、周密の思慮を欠き、周密の慮思なる者は遠大の志望を缺くと云ふ様に、一方に偏するのであるから、遂に思はぬ失敗を招くのである、されば精細の一事も人事を處するに又一要訣なるを知らねばならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月十三日

百事の成るや、必ず之を敬するにあり。其の敗る、や。必ず之を慢するに在り。

(荀子)

漢室を復興せしめたる有名なる諸葛孔明すら、智勇拔群なるに係はらず、平生其の身を持するは謹慎の二字であつた、即ち慎みを加へることであつて、これ即ち持敬に外ならぬのである。然れども此の反對が即ち放肆、我儘と云ふものであつて、智者たり愚者たるの分岐點は實に、此の持敬と放肆とに在る。



八月十四日

所謂其の意を誠にするとは、自ら欺くなきなり。

(大學)

益軒先生、更に前提の言に付して教へて曰く、「凡そ人の一念の不善も、必ず天に通ずるの理あり、天は高きに居て、ひくきに聞くと云へり、上天を欺くべからず、畏るべし、人を欺けば終に其の偽顯はる、内に誠あれば、必ず外にあらはると云へり、下、人を欺くべからず、恥づべし、天を欺き人を欺けば、共にわが心を欺くによれ」と、之れ吾人の箴となし以て常に青天白日の如き心を以て自己に對して恥づべき行爲を爲さざる様にせねばならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月十五日

八十の手習ひ。

(日本俚諺)

一世の奇傑グラットストンは、八十余歳の頽齡に達しながら子弟を従へて郊外に自轉車の練習を爲したと云ふ。グ翁の精力の強き、固より此人にして此異數の行ひがあるのだけけれども、亦以て外人の活動的なるを一般に推測するに難くないのである。蓋し八十の手習ひとは、斯くの如き元氣横溢せるを云ふのであらう。



八月十六日

大海も釣瓶も同じやとる月。

(古句)

成功者の眼中に成功なし、活動あるのみである。先づ活動あり、豊成功せざらむと欲するも得んやである。然るに貧者の眼中には、活動なくして、唯之れ成功のみである。先づ成功を夢みて活動を爲さず、豊成功すべきの理あらんやである。宿せば大海にも釣瓶にも名月はあるものを、唯、成功のみを念頭に掛くる勿れ、先づ活動せよ、活動より活動に移れ、活動そのものは實に成功の要素なればなり。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月十七日

河深ければ水滑らかなり。

(シエクスピア)

青年は水の如し、水は活動せざれば腐敗す、海に在りては波
瀾を起し、瀧川の流に在りては岩に激して飛沫を上げ、斯く
の如くなるが故に、河海の水は腐敗せざれども、停滞不動の沼
澤に在る水に至りては腐敗するものである。之れ即ち活動せざ
るが故である。青年にして腐敗し、墮落し、彼の危険思想を起
す者の如きも畢竟此の哲理に胚胎するのである。河深ければ水
滑かなると同時に人も活動の量大なれば不満なき好果を見るも
のである。



八月十八日

學に老少なし、達するものを先となす。

(古諺)

人物は必ずしも高級學校の卒業者とは限らずして、實用の才
幹あるものは、自ら世の推す所となる譯なれば、獨學にても實
用の學を修むる人は、終に秀優の地を占むるに至るのである。
労働者にして常識を欠かず、職人にして科學の思惟に富めるも
のあるに至りたるは即ち學に老少なく、強ち學校教育にのみ依
らざるを證するのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月十九日

健康と智慧とは、人生の二大幸福なり。

(ギリシヤ俚諺)

智慧ありて正直なれば昔時は、先づ以て出世の資格であるとしたが、今日の世は尙ほ之れに健康の一を加へざるべからず。兵役に従事するも體質の弱き者は採用せられず、學校の入學試験にも體格試験は第一は行はるゝものなれば、青年にして志を立てるの人は身の不養生は大禁物とせざるべからず。然らざるに於ては遂には出頭の途なきに至らんのみ。



八月二十日

汝よ後來如何なる終局を成さんやと云ふに着眼せん人よりは、寧ろ今日如何にして、光陰を費さんと云ふに注意すべし。

(ヘンリーマルティン)

人は究竟樂天の子にして希望に生くるものである。然れども人生悲むべきは、追悔の心なき者である。追悔の心は向上の第一歩である。奮勵の第一階梯である、更に向上奮勵もつて理想に近くを得るものである。これ處世の規矩にして修養の根底も亦實に茲に存するのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月二十一日

心の駒の手綱ゆるすな。

(日本俚諺)

人の他の禽獸と異なる所は身體の食物を得ることに汲々たる外に、又精神の食物によつて安心を求むるの心あるからである。若し此の心がなかつたならば吾等の生活は無意義になり終るのである。茲に於て吾人は、心の駒の手綱ゆるすことなく、専念精神の食物によつて安心を求め、最も有意義なる生活をせねばならぬ。



八月二十二日

うか／＼と暮らすやうでも瓢箪の

胸のあたりにしめく／＼りある。

(大綱和尚)

大綱和尚、後進の爲めに瓢箪を通じて調せる語に、「瓢、ひさご、汝、眞瓜の位もなく、西瓜の暑を拂ふ徳もなし、しかれども氣も軽く、中心むなしくして無慾なれど、仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へあるは、駒を出して樂めり、汝、瓜の類に居て、庖刀の難を遇はざるは智なり、鯰を押へてのがさしむるは仁なり、羽柴公の馬印となつて強敵を挫くは勇なり、汝、性は善なりと云ふべし」と、一生ブラ／＼として終るの輩は須らく鑒みる所なかるべからず。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月二十三日

失敗は成功の母なり。

(古諺)

人間社會の仕事は、何時もながら、順風に帆を揚げて居るやうに行くものは一つもない、時に雨あり、風もあり、波も荒れ狂ふ時もある。斯かる時に出遇ふた時は、自己を覆へされぬやう、沈まされぬやうに、風波と健闘すべきである。若し此の場合に於て健闘の準備を欠ける者は、忽ちに溺死の運命に陥るのである、乍併失敗は成功の母なりの格言にして真理なりとせば、この波瀾即ち蹉跌、失敗と闘ふことは將來の幸福を招致する所以に外ならぬのである。



八月二十四日

汝の敵を愛せよ。

(キリスト)

自由の保護を目的とした大戦争で、斷魔の劔を揮つた「グラント」は、實に戦争の優者なりに相違ないが、闘争を好める人ではなかつた、彼は武装せる敵は、猛烈に之を撃退して、最後の兵だに餘さなかつたのであるが、一面、戦後に於ては、慈愛を以て敵を遇し、前日の仇敵に其馬を貸與へ、農業を営むの資をも給したとのことである。グラントは斯くの如くにして、即ち職務に忠實、本分を守る勇氣、勝利と成功を見るまで奮闘する決心等は實に吾人の良師である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月二十五日

士道は義より大なるはなし。義は勇に因つて行はれ、勇は義に因て長ず。
(吉田松陰)

梶原景時は屢々忠臣を讒訴して、之を陥れしかば、千羽、三浦、畠山、小山等、當時の宿老六十六人、鶴岡の社殿に参集し連暑して之を訴へしかば、將軍頼家、其書を景時に下して、之に答辯せしむ。景時答ふこと能はず。遂に滅亡に及べり、當時武士の信義を重んじ、剛直廉耻を尊び、佞媚姦邪を惡む有様、概ね此の類であつた。



八月二十六日

世には數分間の價が數年間より貴きことがある。

(アルフォルト)

時間は其の長さに比例して、其の必要又は其の價値に差等あるものではない、冥々の中に過ぎた五分間に一生涯の大事件となるべきことが無いとも限らぬ。然し、誰もこの肝要な時を指示するものはない。唯常に意を用ふるにあるのである。現在に意を用ふることが十分であれば、これが過去となつたに於ても決して後悔するやうな事はない筈である。吾人は唯、將來を察知し現在に全ければ足るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月二十七日

人生の回轉期と云ふは、過去の練習を歸結する時である。たとへ不意の出来事でも、常に用意して之を利用しやうと準備して居る人には決して怖るべきものではない。

(アーノルド)

人生は不斷の試験である。常に用意し、常に慎重であれ。而して舌あらば語れ、筆あらば記せ、腕あらば揮へ、足あらば歩め、今ぞ新陳代謝の時代である。請ふ、機會を逸せず起つて而して奮へ。



八月二十八日

英國の富強は至貧至賤の人の力に頼るなり、若此等貧賤の人の英國を利するものを除けば他の人民の英國の爲めに成就せるものは幾何もあるなし。

(スマイルズ)

青年諸士よ、諸士は貧困の悲境に沈淪せば先づ世間に飢死するもの、少なきを思へ、基督の訓戒を思へ、次に偉人傑士の貧苦と戦ひたるを思へ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月二十九日

實のなる木は花より知れる。

(日本俚諺)

明智光秀のこせう小姓の者一人、椽側の障子の外を通るとして、目通りを通るが如く、恭しく手をつきて敬禮して行き過ぎたのを、諸侯等物の隙より之を見て、後光秀に向つて、しかくの旨を語りて「近頃奇特なる者かな」と稱讚ありしを、光秀聞て「それは三宅彌平治と申す者ならん、彼はいさ、かも影ひなたなき者である」と、直に呼び出して尋ねしに、果して其者は彌平治であつた、此彌平治は後に明智左馬之助と號し、光秀が股肱の將となつた者である、實に實のなる木は花より知るを得るとは蓋し吾人を欺かざるなり。



八月三十日

人をして人たらしむるは深き慈の涙也。(トムソン)

源の龍武丸、九歳の時、磯野善兵衛と云ふ者より、三光を鳴く鶯を籠に入れて差上たら、其志は恭なけれども、人を故なく捕へて籠に入れ、謠など歌はせて聞くに異ならず唯鶯は竹の林、又梅の枝などにとまりて居て、自から鳴くこそ面白けれ、籠の内に居て、外を思ひて歎く聲を聞て何かせんとて、磯野が歸りたる後侍女に命じて放たせたと、後に至りて才徳高き勇將となりたりと、深き慈愛は他人の爲めならずして、皆己が身の人たるの道である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

八月三十一日

忍耐は最も重要な品性の一なり。而して必ずその報酬を持ち來るべし。之に反して短氣は吾人の損害を與へん。

(マーシャル)

吾人は常に斯く信じて居る、即ち其の價に提供せば、吾人の要する所の何物をも得べしと、而して茲に云ふ價とは、不屈の堅確なる精神である。轉軻不遇に遭ふとも、絶望の歎を發せず、志操賢實依然として挫けず、邁往進取の奮闘力に富むは、一つに此の大精神があるからである。



九月一日

我の有する才能は、勤勉より得たものである、何人でも我だけの勤勉を惜まなければ、我の如く成功すること疑ひない。(シヨン、バック)

人は其の爲せる所の集合體である。故に人の事業の成否は、當に其の労働の量の多少に依るのである。働かざれば饑ゆるとは自然の告示である、心靈も饑え、徳義も饑え、身心共に饑ゆるに至るのである。

ミルトンの妙想ありとも、其不斷の勤勉が無かつたならば彼の雄篇傑作は世に出なかつたであらう。諸子！成功は、我等が勤勉の結果の擔へであることを記憶せねばならぬのである。

一日一訓を守れ

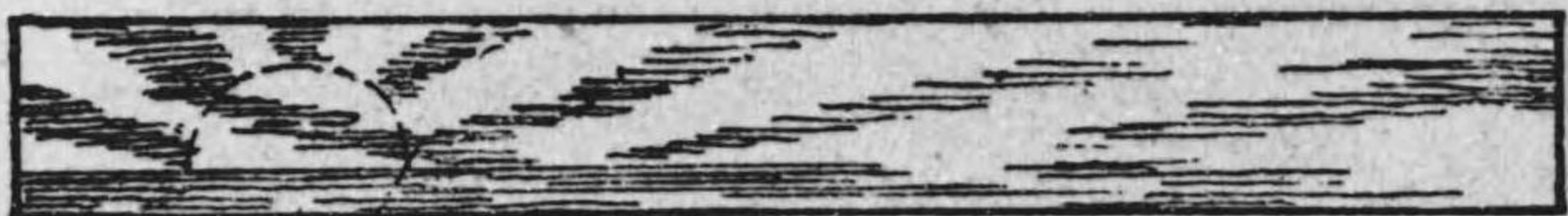


一日一訓を守れ

九月二日

(古 諺)

満足せる人は富めり。
分限を守つて満足を知ると云ふことを充分に悟り得たならば
假令金銭はあつても、不自由の思ひ、苦しい思ひは少しもない
却つて其の不自由とする所に愉快な楽しい所が生じて来る、若
しさうでないとならば山に如き財産を持つて立派な地位に立つ
ても、常に不足勝で少しも心に愉快はない、是れ即ち慾望の奴
隷となつたのである。満足せる人は富めり、縦、其の財に於て
多少不足はあるにせよ、其精神に於て富みたるなり、斯くてこ
そ人世は有意義なりと云ふを得べし。



九月三日

氣は強く決心堅く慾うすく

こゝろは細く膽は太かれ。

(道 歌)

人事百般を處理する上に於て、氣が弱ければ事は成らず、膽
は強く且つ大きく持てば大概の事には屈せず、加之も細心の準
備を以て慾望に捉はれず其の事に當つたならば決して自己の所
信を貫徹することが左程に困難ではないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月四日

世の中は狂言綺語と思ふべし

昨日の旦那今日の駕籠かき。

(古歌)

榮枯盛衰は世の常態、人生の法則である、轉んだものは起き上がる。立つたものは又轉ぶ、倒れても勇氣と忍耐とを足とすれば、再興必定である、是れまた人生の法則である。



九月五日

完全なる教育を子女に遺すは遺産中の最良なるものなり。

(スコット)

元和元年九月酒井雅樂頭忠世、土井大煩頭利勝、青山伯耆守忠俊の三人を、家光公へ附せらる、時、家康公の曰はく、今日より汝等三人を、竹千代(家光公)に附くべき旨、將軍(秀忠公)より我に内談あり、將軍の内意は、雅樂を以て後見とす、仁を以て生立よ、大煩は智を以て諫めよ、伯耆は勇を以て守立てよ、さて三人一つに和合して萬事諫言せよ、竹千代を家康の風儀に守立てんと思ふな、又秀忠の様にとも思ふな、唯面々天性の生得の風儀あるものなれば、風儀を其性の儘に守立てよと云はれたることである。子を持つ親の最上の遺産としては斯くあるべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月六日

急いで事は仕損ずる。

(日本俚諺)

世の決断に乏しい者は之の言を以て唯一の口術となして、優柔不断却つて決断に富む者を指して猪勇と罵り、毫も果断決行を勉めんとはしないのである。けれども彼等は果断と猪勇とを誤解して居るのである。猪勇とは怒れる猪が狂ふが如く前後の分別なくして狂暴の振舞をするのを云ふのである。けれども果断とは決して斯かる無謀の決行を云ふのではない。果断とは明確なる意志の判断せらるゝのみならず、利益は轉倒して損失となり、遂に不測の損耗を招かねばならぬやうな事がある。然る



に若し之に反して果断決行毫も遲疑することなく、機會を捉へて神速に商策を施し、幸ひに其圖に當ることを得ば、期せずして財貨を足下に群集し得べし、以て繁榮利達幸福を得る事が出来るのは明白なる事であると確信する。

九月七日

文明は自然に勝つ意なり。

(バックル)

生物學者の議論を聞くと、動物なり人類なりが進化するは、周圍の作用によるもので、之れに依つて其の性質も變はり、其の形態も變化すと説いてある。其の形態なり性質なりが變はるのは、畢竟周圍に或は感應、或は抵抗する結果である。即ち人

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

生の進歩は境遇に對峙して始めて起るもので、かう云ふ風に自分の奮闘力を惹起するものは、逆境でなく、寧ろ順境と云ふべきである。

九月八日

金が敵

(日本俚諺)

男子は一面に、妻子の爲に働く爲めに生れたるもの也。妻子の爲めに金を欲しがるは、自然の人情なり。妻子の爲めに金を貪るも、人間の恩愛、さもあるべし。されど、富家の子弟は、多く豚犬である。母親の晩年之が爲に苦しむ者少からず。金が敵とは宜べなる哉、黄金必ずしも一家の幸福を増すものに非ざるなり。



九月九日

智恵は運命の征服者なり。

(ジューエナル)

シカゴ世界大博覽會開催當時、佛國の名士連は觀覽の爲め「バン、バンドル」鐵道の列車に搭じて「インディアナ」州の一端にさしか、つた。偶ま「ジエンニー、ケーリー」と呼ぶ少女が列車の進行して来る線路の下の枕木が焼えつ、あるのを發見して、健氣にも恐るべき災害の起るべきを察し、忽ち身に纏つた赤フランネルのスカートを裂いて、之を力の限り打ち振り、列車に警戒を與へた、車掌は早くも之を認め、幸に災禍を免がれ、七百の名士は、此の少女の勇氣と機智とに因つて、生命が保證されたのであつた。然り彼ケリーの智は運命を征服せる偉大なるものであつたのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月十日

以心傳心。

(日本俚諺)

人の精神の働きは、複雑なり、微妙なり、深淵也、高大也、いくら云ひ聞かされても、如何に努力しても、一年たつても、二年たつても十年たつても、二十年たつても、解からざるものは遂に解らず。解つたもの同士にて解りあひて、茲に以心傳心と云ふことが起るものである。つまり人の精神作用には、一種の無線電信がある。

余は更に極言す、精神上無線電信の一切きかざるものは、愚人也、若しくは凡人なりきくものは凡人以上の人であることを



九月十一日

智者は惑はず。

(孔子)

人に食慾ありて食を求め、色慾ありて配偶を求むるが如く、知識慾ありて理を窮はめんとするのである。科擧、哲學、宗教をきはむとするは、この慾の致す所である。食色は、動物の根本的性慾にして、人とても、他の動物と異ならず。智識慾は、人にありてはじめて之を見る。人にありても無學文盲なるものには之れなければ、少し教育あるものは皆之れを有するものである。而して人によりては、その慾の強さ、食色などよりも更に甚だしきものある。智者は惑はず、此の慾を満し得てこそ人らしき人となるのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月十二日

慾の深い鷹は爪が抜ける。

(日本俚諺)

釣魚すきの男、ごみ繩を張りて、一擧して數百尾の沙魚を獲て、喜んで曰く「かくまで多く釣らるゝとは、よく〜馬鹿なる魚也」と、沙魚之を聞いて、笑ふて曰く「釣らるゝものは、我のみならず。この前の日曜も、又其の前の日曜も、時間を空費し、金を空費して、魚釣りに來たる御身も、亦魚に釣られたるにあらすや」と。爪の抜くるも知らずして慾望を満さんとする徒は以て箴となすべきである。



九月十三日

習慣は第二の天性也。

(古諺)

年少にして怠けものであればその精神を死に導き、人生を没却に葬り、其習慣は第二の天性となる。そして終生浮ぶ瀬がなくなるのである。惰けて遊んでばかり居れば事物の間に隙が出來、其の理を滅してしまひ、見易かつた關係も是を見わくることとが六ヶ敷なる。而して遂には自己を没却し再び起つことが出來ない人となり了るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月十四日

人の道は心に在り、人の心は行に在り。

(新井白蛾)

上を上として敬つて禮を失せず、下を下として慈しむことを忘れず、他を救ふを忘れず他に救はるゝを忘れ、自策自勵し、協同一致して、この生を完ふするこれ人中の人である。實に人は協同を意味し、擁護を意味するものである。人の世に處する人の道を全ふするに在るは勿論である。



九月十五日

人に見よおのがゑならぬ花の香に

をりつくさるゝ梅の下えだ。

(中院通躬卿)

勝つことを好むは人情の常、まさるをにくむは人慾のつねである。このゆゑに材藝ある人はなほ慎むべし。木も林も出づれば風かならず折るものである。材智は身の讐と戒められたる前提の歌、今の世の才子の倫となすべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月十六日

成徳達材は師恩益友多きに居る、故に君子は交遊を慎む。

(吉田松蔭)

人は善悪の友に依りて其の行を移すものであるから、人の相
交るや、互に其の性情の感化を受け、其の感化の善悪は遂に習
慣となり、又た牢として抜くべからざる勢力を養ふものである
から、身を修むるの急務としては是非共良友を撰擇すべきは勿
論である。



九月十七日

儘ならぬ浮世。

(日本俚諺)

人各々、其の分を守りて足ることを知るは、即ち質素儉約の
本領であるが、而かも、吾等は浮世の儘なることを聞くのは、
甚だ其の意を得ぬ。何事も儘になるならば、人誰か勤勞努力す
る者があらう。其の儘ならぬ處に浮世の眞價があり、人生の快
樂があるのであつて存するのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月十八日

渴しても盗泉の水を飲まず。

(古諺)

今は渴せずとも争ふて盗泉の水ならぬ金銭に腰を屈するに至つたのであるから、人間の意気とか、氣慨とか云ふものは、或は全く地を掃ふて去りはせぬかと疑はれる。

古來の大人物は、常に金銭以上に超越し、貧富に依つて其の節義を變せず、境遇の爲めに其の志を枉げず、奮闘努力、精勵勤勉、畢生の勇を鼓して其の目的に向つて奮進したればこそ能く偉業を成就し、美績を後世に貽して千歳の師表と仰がれたのである。近世の青年鑑みる所なくして可なららやである。



九月十九日

祖先を敬ひ父母に孝を盡すべし。

(藤田傳三郎)

神と親とを大切にすること得の人は、まづ道の本立の固き人故其の人必ず君に仕へては、忠義を盡し、朋友と交りては、信義があり、妻子に對しては、慈愛ある人となること論はないのである。先祖を大切にすることが人たる者の道の本である。然り、先祖を大切にすれば則ち孝にして、孝なる人に不忠不義の行をする人は、決してないものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月二十日

習ふより慣れよ。

(日本俚諺)

從來散漫に流れたる心でも、斯くと一たび志が立つたならば、統一せられて志す所に集中し、専心一意に之に従事するこ
とが出来るのであるから、俗に所謂習ふより慣れよで、彌々其
の事に興味を感じ、其の事か容易に行はれ、其の間に努力の習
慣を生じて、思はず其の勢力が蓄積せられて、成功を齎らして
來るのである。



九月二十一日

咲かざれば櫻を人の折らましや

さくらの仇は櫻なりけり。不(知讀人)

名聲一代に轟き、世人の注目を一身に集めても、彼れこれ義
理に絡まれ、終には南洲翁の如く終りを完ふせぬ人もある。
位の高き人を見ると、其榮華が羨ましくなるが、併し位山の
頂に登りて見れば、矢張り麓の伏屋の方が住み易いと感ずる
が如く、他人より見て羨ましいと思ふて居ることが當人には云
ひ知れの辛苦に胸を痛むることがある。要は吾人の現在に慰安
を得て奮闘を持続すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月二十二日

大事を成さむと欲せば小なることを怠らず勤むべし。小積りて大となればなり。

(二宮尊徳)

二宮尊徳翁の此の言に對して、世或は「消極的なり」と云ふものあれども、若し然りとするも、翁の主義と方法とは消極ならむが爲めに消極的なるにあらずして、積極ならむが爲めの消極であるから、これ強ち不可なる所以は認められぬのである。翁の消極は活動の豫備に過ぎなかつたのである。吾人が以て師事し來れるもの此の一事にあるのである。



九月二十三日

汝は同じ水を以て再び沐浴すること能はず。

(ヘラクリトス)

水は流れて止まる時なく、時は去つて又歸らぬものである。事も興味も熱心も、一度去らば再び得ることは蓋し至難である。

鐵は熱したる時に之を打つべし、事には時機のあることを忘れてはならぬ。然り時間を正確に守るは、勤勉の慣習を生じ、責任を盡し、義務を重んずる基であつて、之れ實は立身出世の必須條件である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月二十四日

ぶんぐくと障子に蛇のとぶ見れば

明るき方へ迷ふなりけり。(二宮尊徳)

秋と春とは、海外より渡り鳥が、我國各所の燈臺の火光を
目蒐けて飛來り、衝き當りて斃る、もの幾千萬なるか知れない
との事である。尊徳翁の歌は青年の誠められたるものであるが
面白き諷刺ならずや。今日所謂高等遊民が散在しつゝあるも、
自らは知るや知らずや。所謂明るき方へ迷はざらむことを地方
青年の爲めに叱々するものである。



九月二十五日

日暮れて途遠し。

(日本俚諺)

富士山に登らむとせる者が、途中の道草にのみ憧れ居ると、
聽て、日暮れて途遠しの歎聲起らむ。人世の行路亦た同じであ
る。

一齋先生の語に「満を引いて度に中る、發して空箭なし。人
事宜しく射の如く然るべし」とあり。さりながら、如何せん、
人事の多くは「空箭」の多きこそ遺憾至極である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月二十六日

疑心暗鬼を生ず。

(日本俚諺)

昔明雲座主、相者に向ひて我の相に兵仗の難ありや否やと問ひしに、相者答へて其相ありと云ふ。其相とは如何にと重ねて問ひしに、傷害の恐あるべからざる御身にて之を問ひ給ふこそ即ち危難の兆なりと答ひしが、後終に矢に中りて失せたとのことである。凡心常に憂ふ處あれば、多くは其憂に陥るのである。病を恐るゝもの却つて病に罹るは其の好證ではないか。疑心は却つて思はぬ暗鬼を招くこと往々である。



九月二十七日

不仕合せありとて、世をばうらむなよ

恐れつ、しみよき事をせよ。

(林 義由)

張良は博浪沙の快擧に失敗せり、然れども、彼が劉氏を翼けて漢家四百年の泰平を起したる大功績は、則ち此の失敗に依つて得たる所の奮激に由るのである。是實に大蘇の留虎論に云へる處、然らば則ち青年の失敗は一面幸福の前提のみと思ふべし。

一日一訓を守れ



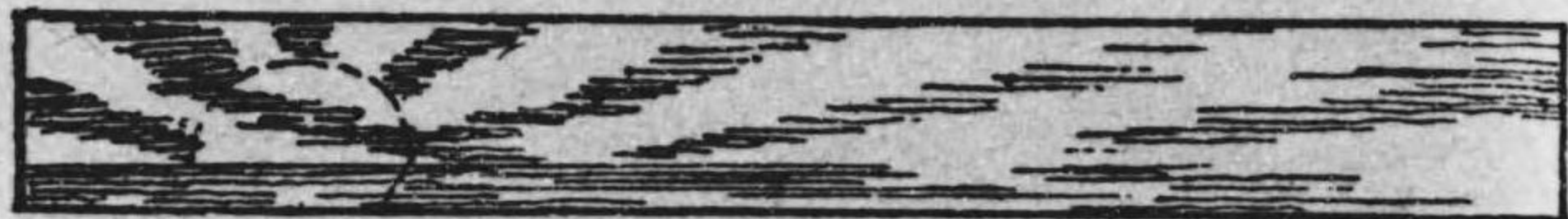
一日一訓を守れ

九月二十八日

信を人に得れば、財の足らざるなし。

(佐藤一齋)

人の信用を得るが中に於ても殊に取分て青年の人が先輩の信用を得ること、被傭者が傭者の信用を得ること、商人が取引先の信用を得ること等は最も必要の事である。青年に於る先輩、被傭者に於ける傭者、商人に於ける取引先は他の一方の運命を左右するの實権者である。勉めて其信用を得るに注意せねばならぬ。立身出世の階梯は茲にあるのである。



九月二十九日

天は自ら働かざる者を助くるものにあらず。

(ソフホクリース)

天地萬物は各々其天分天職を盡くして働かんが爲めに造られたものである。而して人間は萬物の靈長であるから、其責任最も重大であつて、其労働も最も多からねばならぬ。成功は、我等が労働の結果である、労働せずして成功、成功と叫ぶは、畢竟愚者の世迷言であると云はねばならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

九月三十日

吳竹のほどよき節をたがへずば

すえはの露も亂れざらまじ。(昭憲皇太后)

分を超えずして消極的に産を守り、而かも、積極的に産を成すべき所以の途を訓へ給ふ前提の御歌である。固より人としては終始勤勞のみに居ることは不可能であるから、大に働くと共に時としては其の勞を慰むるも善いが、唯だ戒むべきは、花を賞し却へて自身を忘れ、月を眺めて却つて本務を忘れ易き事である。即ち勞を慰むるの途を誤まつて遊樂に耽り、遂に勤勞を厭ふの弊風を醸さんことを恐れねばならぬ。



十月一日

天下に唯一つ貪慾を以て徳行となる事あり、光陰を貪ることと是れなり。

(セネカ)

時間を貪る慾深き人にあらざれば成功せず、時間は黄金なりと謂ふも、光陰の尊きは恐らく金銀の及ぶ所に非ず、金銀ならば今日之を失ふも明日大に稼ぐ時に之を償ふて餘りあることもあらん、然かれども、時間は一度之を喪う時は回復の時機はないのである。名利に貪慾なれば道徳に反くこと多きも光陰は之れを貪ることによりて人の徳義を害しないのである。

一日一訓を守れ

一日一訓を守れ

十月二日

若し大石の道路に横はることあらば、儒者は之を視て行路の障碍と爲し、勇者は之を視て進歩の登級と爲す。

(カーライル)

大人と小人との別は、特に剛毅なると、剛毅ならざるとの別のみ、人一人たび志を定めば其後或は死すべし、或は成就すべし決して中廢すべからずとは之れボックストンの言なれども、此等の言は如何にも吾等が進取的の勇氣を喚起せしむる良薬であつて、吾等の常に之を口にして、其の怯懦に鞭ちて、勇氣を鼓舞すべきである。



十月三日

諂ひて富める人よりへつらはで

まづしき身こそ心やすけれ。

(一休禪師)

世間に榮辱と稱するものを考ふるに、外聞に係るものが多くして、中には良心と没交渉のものもある。高位高官は名譽榮華の一には違ひないが、これを得るの動機や方法によつては、良心に愧づべきものもあるであらう。諂ふて求めた榮譽は求めたその即刻耻辱を受けたることを思はねばならぬ。

一日一訓を守れ





一日一訓を守れ

十月四日

稼ぐに追付く貧乏なし。

(日本俚諺)

昔より偉人、英傑と呼ぶるもの、多くは、兎に角富者の人にあらずして、寧ろ貧乏人の出なのである。貧乏嘆する勿れ、貧しければこそ、却つて發憤、激勵の志望も起らん、時運の達観識も養はれん、徒らに貧や薄命に泣くなかれ、古今の俊傑と同じ運命の下に置かれたる身の、運命の奇しさを思ひ、寧ろ感謝して、努力し以て各自の進境を期すべきである。



十月五日

先生と云はる、程の馬鹿でなし。

(川柳)

徹頭徹尾人は正直を守らざるべからず、然れども其の正直たるや明直なるを要するのである。愚直なるべからず。明直とは智慮ある正直を云ふ、愚直とは正直は正直であるが、野生の正直にして智識を備へず、人に愚弄せられ易き者である。舊來我國の道學先生なるものは皆之の範に列するの人であつた。されば吾人は愚直ならざる明直の人たらざるべからず。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月六日

ほんに思ひば浮世は鏡

笑ひ顔すりや笑ひ顔。

元來世の中は、人間の住む所であつて、鬼の棲む所ではない
自分が不愉快であるからと三つて、世の中を睨んで見ると、世
の中の人も睨み返し、笑つて見れば、世の中の人も笑つて之れ
に對するものである。要するに、泣いて暮らすも、笑つて暮ら
すも、吾れと吾が身の心柄一つである。



十月七日

蜻蛉や飛び直しても元の枝。

(超 波)

忍耐なき人が、屢々己が好悪に任せて去就を二三にする如き
は、終に成功を爲し得ず、即ち幾回飛直すも依然同じ枝たるを
奈何んせんやである。特に商家に仕ふる者の如きは、一層忍耐
して事に嫌厭の情を起してはならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月八日

小事集まつて完美を成す、而も完美は小事にあらざるなり。
(ミケルエンゲロー)

那翁、嘗て、ポーランドに於て敵軍の爲めに圍繞せられた時彼は陣中に在つて毫も本國への書信を絶つことはなかつた。これ全く始めから深く意を茲に用ひて、豫め備ふる所があつたからである。而して其書信中に彼は單に軍事に關する事ばかりでなく本國の政治の事、教育の事、其他尙百般の事に亘つて、種々精細なる注意を記してあつたとの事であつた。小事集まつて完美を成す、那翁の如き英傑にして尙且つ細事を忽にせなかつたのである。



十月九日

心だに誠の道にかなひなば

いのらすとても神や知るらん。

(古歌)

萬行諸善一つとして至誠に依らざるものはないのである。實に至誠は萬行の根本であつて、諸善は精神である。故に吾人の眞に貴むべきは至誠である。然り、神佛を感應せしむる所の至誠であらねばならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月十日

心は虚にせざるべからず。虚なれば義理来り居る。心は實にせざるべからず、實なれば即ち物欲入らず。

(菜根譚)

物慾心に充つれば、義理入るの餘地がなく、義理心に充つれば、物慾が入るの餘地が無いのである。心を虚にするも、實にするも、畢竟するに、義理を入れて物慾を去らむとするに外ならぬのである。



十月十一日

父母の子に於ける、一體にして兩分、兩分にして異息、草卉の華實あるが若く、樹木の根心あるが若し。(呂氏春秋) 如水黒田孝高、病重く、死する前三十日許の間、諸臣を甚しく罵倒す。諸臣驚きて云ふ「病甚しく殊に亂心の體なり。別に諫むる人もなし」とて其子長政筑前守に云ふ。筑前守は父如水の心を知らざれば「諸臣畏れ憂ふ。少し寛くし給へ」と密に云ふ。如水「耳を寄せよ」とて、小聲に云はれしは「是は汝が爲めなり。亂心にはあらず、諸臣にあかれて、早く筑前殿の代になれかしと思はせむ爲めなり」と。子に對する親の眞情皆斯くの如きものである。子たるもの報ゆるところなくして可なら

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
もやてゐる。

十月十二日

早起、勤勉、忠實、細心、正直なる人で好運にならざる例を聞かず。
(アジソン)

天才の九分は精勵である、愚者には精勵の徳がない。愚者は運命や境遇と云ふことを云ふ。しかし、成功は法則に據つて來るのであつて、運命に由つて來るのではない。故に智者は因果を信する。然りアジソンの言の如く、此の因にして此の果を得るのである。



十月十三日

世人、富と力との二者を能く理解する者鮮し、故に富を以て力より貴重なるものとす。

(ペイコン)

人は、自己の力に信頼し、克己の徳を養ふべし。此の二つの者は、實に人をして己己の井水を呑み、自己のパンを食ひ、業務を習ひ、労働し且つ當に爲すべき善行を遂げしむるものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月十四日

鼠捕る猫は爪隠す。

(日本俚諺)

小才あるものは、恰も浮萍と同一にして、朝には此方に咲き夕には彼岸に漂ひ、利慾に就き權勢を趁ふ、無主義無節操の徒と云ふべしである。一身の大事を誤るは、この輩に多いのである。畢竟、才子の才子あしきは、これ木葉才子に過ぎずして、真正の才子は、圓滿充實、猥りに才を弄するものでないのである。鼠捕る猫は爪隠す。



十月十五日

天の將に大任を、是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の體膚を餓せしめ其の身を空乏にし、其の爲す所を拂亂す、心を動し、性を忍びて、其の能はざる所を増益する所以なり。(孔夫子) 吾人が一旦失敗の爲めに財産を失ふことあらば、是天が吾人の財産を有する間は爲す能はざる大仕事を爲さしめんが爲めであると思ひ、決して悲んではならぬ。金剛石を吾人の心中に發見した、粗き金剛石を磨くには、貧困の砂でなければならぬ。神は人の特質の存する所と、それを發達せしむる訓練の必要を知つて居る。雪多からざれば五穀は豊實でない。嚴寒に遭はざ

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

れば強堅なる木材は生じないのである。

十月十六日

富よりも品性を取れ、假令全世界の富を得るとも汝が品性の總べてを失は、何等の益あらんや。(ローレンス)

假令身に垢塵を附け襤褸を纏ふとも人をして其の天真の人格に打たる、の時、思はず尊敬の念を禁する能はざらしむるものは、之れ即ち品性である。實に尊むべきは爵位にあらず、金錢にあらず、將た又財寶にあらずして、極善極美の品性である。故に處世の素質として先づ此の品性の修養に努むべきである。



十月十七日

己に克つものは、眞の勝利者也。

(ヒースイル)

凡て惡癖に打ち克は克己である。煙草を禁じ、間食を禁ずるも一つの克己である。なまけ癖、遊び癖、妬む癖、ひがむ癖等に打ち克つも亦之れ克己である。怖ろし、恥かし、悲し、つらし、と思ふ心に打ち克つも克己である。

後光明天皇の雷を怖る、心に克ち給ひしも、伊能忠敬が好める碁をやめしも、デモスゼネヌが悪しき發音癖を矯めたるも皆克己の力ならざるはないのである。然り克己は小さき卑しき吾人をして、高雅に導く唯一の手引である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月十八日

水車みづから臼のみづからは

爲すとも知らずで米やしらせん。

(古歌)

人の行爲の及ぶ末の末迄追究すれば、將基倒しの如く、それよりそれと思ひ及ばぬ所まで達して、恐ろしくもあれどまた樂みも多し、己の心の命するまゝ、狭きながらも力を盡せば、その及ばす處は廣く殆んど限りなきに至らん。



十月十九日

憂き事のなほ此上に積れかし

限りある身の力ためさん。(宮本武藏)

人間には弾力が必要である。世上の煩悶に於て自暴自棄となつたり、挫けこんで仕舞つては何にもならない。人生の艱難は汝を玉にするのである、寒時は闇利を寒殺し、熱時は闇利を熱殺する底の意氣と修養が無くてはならぬ、寒いからとて炬燵と情死する様では何事も成すことは出来ないのである。武藏の弾力性に富たる精神こそ、眞個古武士の面影が現はれて居るのである。此の意氣ありてこそ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月二十日

衣食足つて禮節を知る。

(管仲)

衣食問題は世人の行路に於ける重要問題には相違ないが、果してそれが人生の最大問題なるや否やは今日の如き過度時代に在つては我々日本人、否、寧ろ社會の裏面に勢力を有する婦人に於て特に考ふべき問題であると思ふ。彼等果して街食足りて禮節を知るや如何かは疑はざるを得ないのである。



十月二十一日

機敏ならざる人は、常に厄難は戰はざるを得ず。

(ヘシナツト)

實業青年が世に處して成功する第一の要件は機敏の性である。遅鈍で無性のもは常に他人に蹴落されねばならぬ。一寸したことにも機敏な人は常に注意が深いから、買手を見付け又御客をして、買はざるを得ない様にするものである。俗に云ふ痒い所に手が届く働きとは機敏なる青年にあらざれば爲し得ないのである。成功的青年の一要素として機敏なれと望むのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月二十二日

人を呪はゞ穴二つ。

(日本俚諺)

唯一言の言葉の上にも、目色ばかりでも、悪意の舉動に對して悪意を含ませた舉動をするのは、返報の類である。双方の不爲となるとも利益となることは尠い「怒するは最上の返報」と云つたのは、情けに及向ふ武器のないことを云つたのである。相手の悪意を燃える火に喩へれば、返報は其の火を熾にする薪である。罰は時として水である、一度は消すとても時たてば又燃え上る。自然に全く消え盡すやうにせしむるには、同情に依る寛恕の力あるばかりである。人を祈つて却つて身に災禍を招くものである。



十月二十三日

己の業に忠なる人ならむか、彼は必らず王者の前に立つなるべし。

(ジョンソン)

一心にその職務に熱注するの外、他の邪念を交へざる人であれば、乃ち仰いでも天に恥ぢず、俯しても地に恥ぢず、自ら顧みて良心に疾しき所なく、唯だ己れの正直なる奮闘努力を以て誇りとする人であるから、自然に其の技能は上達し、周囲の信用は日々に加はるばかりで、中心の平和と愉快とを以て日々を楽しく過ごすことが出来るのである。高尚なる人格、尊嚴なる品性は、茲に發揮し得て、終には人生の成功者たるべきは勿論である。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月二十四日

田の草を取りて踏み込む肥しかな。

(古句)

石で無理から抑へて居る間はよいが、少し隙を見出すと忽ち雑草は生繁るものである。故に徹底的に根こぎ引抜かねばならぬ。今迄害を爲せし田の草も、根こぎ引抜いて踏込めば、却つて之れが肥料になるのである。吾人の精神も茲に至るのが眞の修養である。



十月二十五日

命あつての物種。

(日本俚諺)

世に俊才の往々夭折するを聞けども、三十歳を越せば、精神は發達しても、身體は發達せざるものなるが、二十四五才までは、身體も精神も共に並びて發達するものなれば、この際、精神の發達のみを圖りて、身體の發達を圖らざる者は、一時は益することがあるかも知れねど、後日、必ず悔ゆべし。命あつての、物種、度を過ぎるほどに勉むべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十月二十六日

善人も外貌ほどには善人に非ず、悪人も亦外貌ほどには悪人に非ず。
(コルチッチ)

ナポレオンを殺さんと、物影に潜みて待居し一青年は、其目指すナポレオンが、唯一人淡暗き廊下を通るを見て、銃に手を掛けんとする刹那、之を知るや、知らずや、ナポレオンは、青年の方を見て、莞爾と笑ひたる顔を見て、彼の青年、覺えずからりと銃を投げ出して、總べてを自白したとの事である、偉人の風貌に接するや、悪人の青年も、終に、一瞬、轉換して善人となつたのである。



十月二十七日

愛は最長最短の神學也。

(ルーテル)

貞享の頃、遊女勝山は江戸新吉原の全盛なりしが、さる客より、其頃朝鮮より縞鶴と云へる鳥、始めて渡りしを、金を鑄め銀を延べたる籠に入れて勝山に贈りしに、彼も始めは珍らしかりしに、二三日して、縞鶴よく、汝は斯くの如く金銀の籠に入られて、人の寵愛を受け、榮華を極むるは鳥の中にて仕合者と羨む者もあらん、されども我汝が心を察し、此勝山が身に酌み、鳥のあはれを知る、曲輪に住める河竹の身は、籠の鳥に等し、身に錦繡を重ね、耳に妙音を聞くと雖も、王昭君が胡國に籠せられしが如く、牢獄の囚虜に等し、此鳥も珠玉の籠の何と

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

て嬉れしかるべき、嘸や大空の悪しかるべしと、遙に放ちやり
しとぞ、實に「秋來歸志多し、立て籠を開て白閑を放つ」と云
ひし故人の心も思はれてあはれ深し、遊女なりとも、勝山 此
の一事に傳はる。

十月二十八日

私に汝の友を諫めて、公に中を譽めよ。

(バブリアス、サイラス)

淀川にて鯉を取るに、漁夫水中に入りて鯉とならび居て、脇
へかひこみて浮み上るを抱き鯉と云ふとかや、人を諫むるの道
も、初めは其人の悪き事と共にならび居て、折よき所にて善に



趣かする事が肝要である、人に異見するにも、大方の人は其者
の非を擧げて異見を加ふるが故に、いよく容れざるに至るも
のである。まづ其の人の功を上げ賞讃し、斯かる功をなしなが
ら、如何でさる宜しからざる事を爲し給ふや、と順々に説かば
遂には其の意に服するものである。

十月二十九日

利と義とは並び行はれざる也。

(孔子)

耶蘇も亦「富める者の天國に入るは駱駝の針の穴を通するよ
りも難し」と云はれ、更に「野の百合を見よ、つとめず、つむ
がざるにあらずや」と云はれて居る。それは平易に云へば、人

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ
 は利にのみ走る時は、遂に眞正の幸福を享受すること能はずして、果て、仕舞ふもので、終生苦悶の裡に過ごさねばならぬのである。

十月三十日

瞬時に於て十分に活動せば、萬世に亘り善良の行爲を完成したるものなり。

(ラブエーター)

彈丸雨飛の如く、砲烟濃霧の如く、一身の運命朝露の如き間に立ちて、臆せず屈せず、満身の勇を振ひて、奮闘苦戦するものは、戦場の實景である。偉功を奏するも、汚名を蒙るも、皆此の瞬時に起る。人生百般の事、亦概ね斯の如きものである。



十月三十一日

汝の事業を固守せよ。

(ロスタチャイルド)

榮達繁榮を欲せずんば則ち己むのであるが、苟も之を欲するあらば、兎にも角にも、先づ自己の従事せる業務、自己の與へられたる仕事に關して、第一等最良の成績を擧げ得る人とならんことを期すべしである。而して其の仕事が下級の仕事たると高級の仕事たるを問ふこと勿れ、唯、固守して最善の効果を示すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月一日

常盤なる松こそ立てれうごきなき

國を鎮めの神のやしるに。

(明治天皇)

常盤木の、松の緑の蔭濃かなる鎮守の森に、更に祖先の墓前に跪き、過ぎし偉業を偲ぶの時、誰か高潔至誠の真情を發露せしめぬ者があらう。之れ即ち愛郷心の精髓であつて、祖先を崇敬する信念も、協和一致の美風も、亦皆之れよりして發揮せらるゝのであるから、従つて萬民の同心一體となり、君國の安寧進化を祈る所の至誠となり、愛國心となるのである。



十一月二日

蛟龍池中の物ならず。

(三國誌)

偉人、傑士と稱せらるゝ人々も、當初より頭角を現はしたるものにあらずして、多くは智識階級下に在りて、倂々として自己を修養し居たるものなれども、機會に觸るゝ毎に、其の銳鋒を現出して、遂には眞價を發揮し世に認めらるゝに至るのである。

三國誌に周論が玄徳を稱して曰く「蛟龍雲雨を得れば、終に池中の物ならず」君、請ふ之に備へよと。吳王に諫めたのであつた。後、果せる哉、玄徳は池中を出でし蛟龍の如く、蜀の昭烈皇帝と現はれたのであつた。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月三日

膽大ならんと欲し、心は小ならんと欲す。

(古 諺)

昔時、一人の侍あり、中西淡淵先生の家に來りて、我が父は人の爲めに殺されたり、我れ其の子なれば、如何にもして父の仇を尋ね求めてこれを報せばやと語りたりけるに、其者立去りし後、淡淵先生の姉の云ふやう、彼の侍は父の仇を報せんものと云ひたりけれども、決して報する事、得能はじ、如何にと云へば、彼の侍の草履の置き方、不揃にして整はざればなり、と語りしが、果して仇を報すること能はずして、煙草を賣りて僅



に糊口を凌ぎしとぞ。大事を成さんと欲せば大膽なると同時に細心ならざる可からざるは云ふまでもなきことである。

十一月四日

笑ひく川に流るゝ。

(日本俚諺)

過去の失敗を追悔することなかれ、唯だ、過去は過去と打切つて、今から新らしき希望を以て、前へくと進み出づべし。然るに過去の失敗を追悔して、クヨクヨ思ふて断せざる時は、之ぞ笑ひく川に流れて、終生身の浮ぶ瀬なき苦境に沈むに至るべし。ナポレオン曰く、進まんか退かんかと思ひ迷ふ時あらば「進む方に」断すべしと。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月五日

聖人は愚なるが如し。

(古 諺)

司馬喜は俗事に拘泥せざるを以て奇を傳ふるものあり。其の女房が或時、お隣で子が死んだと申しますと云へば『よし』と云ふ、貴郎子供が死んだと云ふに『よし』と申すは餘りではありませんかと云ひ返せば、汝の云ふのも又『よし』と賞めたりと、斯く常に俗事に對しては、よし〜と云ひて顧みざりければ、人呼んで『よし〜先生』と稱したとの事である。然れども司馬喜は、孔明の師事せるの人なれば以て其の人と爲りを知ることが出来るのであらう。



十一月六日

玉磨かざれば光なし、光なければ瓦石たり。

(實語教)

一事を成し一業を遂ぐるにも、鍊磨の功を積まねばならぬのは勿論で、讀書百遍義理自から通すと云ふのも、亦た鍊磨の功を説いたものに外ならぬ。固より鍛練には堅忍不撓の勇猛心を要するもので、殊死奮闘の大覺悟がなければならぬのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月七日

人間の成敗は、生活場裡に入る第一歩に依つて定まる。

(スタエル)

人を成功に導くも、失敗に導くも、實に此の最初の第一歩にあるのである。この毫厘の差が、實に千里の差を生ずるのである。東に向つて進まんとするもの、若し一步誤つて東南に進まぬか、幾千里を歩むも目的地に達すること能はず、進むに従つて、益々目的地に遠ざかるのみである。要す第一歩の正鵠を期すべきである。



十一月八日

勇將の下に弱卒なし。

(日本格言)

ナポレオンが非凡の將軍たるは、今更らしく嘖々する必要はあるまいが、一面、彼は部下の心服を得るの術、所謂人心統御の手段に通じて居たのである。彼、東洋軍の總督となり、埃及に上陸し、金字塔の高く天に聳ゆるあるを觀、馬を陣頭に驅り凜然大呼して曰く「あ、兵士よ、四千年の齡、彼の塔上より汝等を瞰下す。汝等何ぞ夫れ奮はざる」と、士氣この一語によりて勇氣遽に百倍し、向ふ處敵なき有様であつた。斯くの如きは瑣々たることであるが、彼が大那翁たるの閃きは、二十有六才

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

の當時燦として輝くを見る可し。

十一月九日

青年の字典には、失敗と云ふ語なし。

(西哲言)

目的を固持して、常に敏速に業務に就き、邁往直進倒れて後止むの勇氣と、執着心とがあれば、運命を開拓するには至難でない。然るに若し、不幸にして青年の字典中に、失敗と云ふ語を發見した者があるならば、其人は勇氣の無い人である。執着心のない人であることを表白するものである。



十一月十日

失ひたる一分時は、不運に好機會を與るものなり。

(ナポレオン)

青年は兎角年齒の豊富であつて時間のあるのに油断して、之を徒消しがちな者であるが、頭髮白きを加へた時に如何に後悔しても甲斐はない。世俗に、所謂思ひ立つ日が吉日と云ふは、語句頗る平凡ではあるが、蓋し、成功の要路を示したのもである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月十一日

大事を爲す人は沈着なれ。

(トロー)

男子決して不能の二字を口にする勿れ。風は吹け、波は暴れよ。出づるに道なからしめよ、夜は暗くして燈なからしめよ。此時に際して、沈着にして、加之も除るに良心の命令に従ひ、以て自己の目に邁進する者は、始めて天の重任を享くる力量があるものである。



十一月十二日

天才は天職たらざるべからず、教育に由りて得べきものにあらず。

(ブライデン)

天才は迫害の兒である。不運の友である。天才は暗惨たる窟に生れ、苦心經營の後、初めて光明に發揮し、世界の思想界を指導するに至るのである。社會の重大事業は、概ね涙と、貧と失望とに頭を没した人々に因つて成されるものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月十三日

徳孤ならず、必ず隣あり。

(孔子)

公德を重じ、公益の爲めに盡す者は、獨り現代を徳化するのみならず、實に後世に對して不朽の儀範を垂るゝものである。然り其の大義高節に至りては、仰ぎて以て百世の師とすべく、傳へて以て千歳の範とすべきである。



十一月十四日

餘力あらば文を學べ。

(論語)

弟子入つては則ち孝、出で、は則ち弟、謹みて信に、汎く愛して仁に親み、行つて餘力あれば、これ人としての土臺が出来たるものである。これを棄て、唯衣食の爲めに學問技藝を學ぶは、人よりも禽獸に近いのである。されど、今の世、この人間としての根本義を語らざるもの果して幾であらうか。

一日一訓を守れ



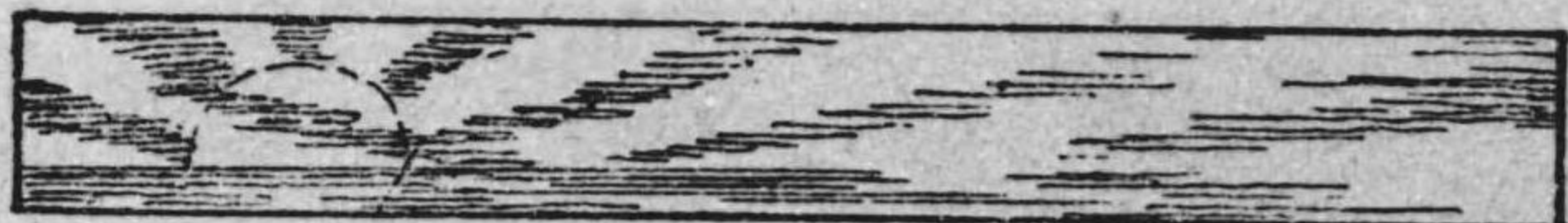
一日一訓を守れ

十一月十五日

君子は器ならず。

(孔子)

茶碗は茶碗、皿は皿と、器物はそれ／＼用ゆべき所各々差がある。然れども、君子は徳を成せるものなれば、其の用途は廣いのである。一技一藝にのみ役に立つ様な人では、未だ以て君子と云ふに足らぬのである。



十一月十六日

悪は陰を忌み、善は陽を忌む。故に悪の顯る、者は禍淺くして、隠る、者は禍深し、善の顯はる、者は功小にして、隠る、者は功大也。

(洪自誠)

陽悪、陽善、共に事なほ小である。眞の悪人は陰悪の人であつて、眞の善人は陰徳の人である。悪事の知れ易く、善事の知れ難きを慨くは普通の人情であつて、之れ即ち、共に罪惡の萌す所である。世人大に三省すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月十七日

徳を以て人を服する者は、中心悦んで誠に服するなり。」

(孟子)

偉人の無言は、凡人の巧なる千萬言にまさることは云ふまでもなし。殊に、氣を壯にするに云ふことは、人物養成上、最も大切なることである。毫も、活氣も、膽氣もなき人が、たゞ諄々として、道理を説けばとて、それで、徳育の能事畢はれるものではない。よしや、其の言ふ所に、缺點ありとも、風采音吐既に人を刺すやうな豪傑の方が、徳育上、遙に有力である。之れ云ふまでもなく人格の力、徳あればこそである。



十一月十八日

力を以て仁を假る者は霸たり、霸は必らず大國を有つ。

(孟子)

人は競争を好み、勝負事を好むものであるが、之れ必ずしも小名譽心にのみ驅られたるものでない、人に勝つは、即ち我力のまされる所以である。人に勝つを喜ぶは、即ち我力のまされるを喜ぶのである。弱きをたすけて、強をくじかむとするも、身をなげうちて國難を平らげんとするも、藝術家が傑作をもせむとするも、商人が大利を得むとするも、冒険家が虎穴に入るも、みな力を喜ぶ人間の常情である。かくて、生存競争常に行はれて、人類長へに進化して止まらぬのである。余は斷言す力の一言にて、まづ人生を解し得べきなりと。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月十九日

心より發する眞の笑みは、合理的効能を有する、如何なる療法にも、遙かに勝ることを認む。(フオレーン)

虚偽を以て世のならはしであるかの如くに云ふのは、暗中飛躍を以て、一生を太く短かく暮し、而して、のたれ死しても更に構はぬと云ふ愚かなる妄言である。實に嘆かはしも亦感むべき考へではないか。吾人は假令臥薪嘗膽の辛さにあらうとも、如何に赤貧の苦に泣かうとも、一點曇りなき清空を仰いで、自心の光明を自覺した時には、實に云ひしれぬ歡喜と大元氣とを感じ得て思はず心より發する眞の笑を浮べざるを得ぬのである



十一月二十日

惻隱の心なきは人に非ず、羞惡の心なきは人に非ず、辭讓の心なきは人に非ず、惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり、人の此の四端あるは、猶その四體あるが如し。(孟子) 勇氣と慈悲とは、一寸考へると全く別個の如くに見え、心理學者は、勇氣は意能の作用で、慈悲は感能の作用であるなどの意見があるやうであるが、勇氣と云ひ又慈悲と云ふも、要するに一つの心の發顯で、二つのものが心にあるのでは無い、時に勇氣となつて顯れ、或る事情には慈悲となつて顯はれるのである。勇氣も慈悲も、落つれば同じ谷川の水で、元は一つの心たる

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

るに過ぎぬ。されば勇氣の強い人は慈悲心に深く、慈悲心に深い人は又勇氣にも強かるべき筈のものである。古へより眞の勇士は、枯尾花のそよぐ音にも哀れを催された美談は蓋し茲に基因するのである。

十一月二十一日

我は善良なる品性と勉強力との外、父より何物も相續せず

(カーネギー)

夫れ達人は大觀す、世に大切なるものは土藏にあらず、正宗の銘刀にあらず、將た金錢にもあらず、善良なる品性と勉強力とに外ならざるなり。前提の言以て他山の石となすべしである



十一月二十二日

自ら恃め。

(ラ、フォンテーヌ)

其の昔平家の落武者は、水鳥の羽音を敵襲來せりと誤信して周章狼狽せし物笑ひあり、是れ自ら恃むの精神を全然喪失せしよりの結果である。かの一世の鴻儒塙檢校、目ある人の不自由を笑ひたりとの好話があるけれども、人自ら恃むの心なく、他に依りて今日を送らむとする者などは、以て戒めとせねばならぬ。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月二十三日

いそがずば濡れざらまじの旅人の

後よりはる、野路のむらさめ。(古歌)

村雨の晴る、をまたで、路を急ぐ旅人の袖を見よ、又晴れたる後に路をゆる人の袖を見よ、仕事の順序の巧拙は、濡れまじき袖を濡らすと否との差異あるにあらずや。處世の事、一に此のヤリクリの巧拙によりて定まるものである。仕事の順序に留意せざる人は、時間を濫費するの人である。否時間を濫費したる上に、身體を無益に疲勞せしむるの人である。



十一月二十四日

精を愛み、神を節す。

(養生篇)

吾々の魂神即ち心と云ふものを使ひ過ぎることがある。かゝる不養生、不節制があるから、それが爲めに精力と云ふものが竭き、生命従つて衰へ、終に多くの疾病が萌して、長壽を得ぬこと、なるのである。つまり前に言つた精を愛み、且つ神を節して養生すべきことが出来ないから、自ら其の身體精神を害ふ故に、疾病は生じ、衰弱を招きて、終には天壽を全ふし得ないのである、之れ所謂自棄自得と云ふべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月二十五日

工勞をせね人は宜しく食ふべからず。(ポーロ)

勤勉ならざる者は、飲食する資格なきものであるとの格言であるが。ポーロも自身は勞働をして生活を爲し、決して地人より費用を仰がなかつたのである。之新教の祖となれる、ルーテル其の人も、其の繁忙極むる身柄なるに係はらず、其の多忙裡にあつて、山林を治め草花を作り、轆轤を轉じ、時計器を作る等の、職工となりて生活の資を得つゝあつたのである。



勞働は神聖なり。

十一月二十六日

(古 諺)

ナポレオン一世、一日、ヘレナの都に在つた時、夫人バルコムベと共に散歩に出掛けた所が、數人の役夫が重き荷物を擔ふてやつて來たので、夫人は、彼等に向つて、側へ避けよと聲をかけ、れば、ナポレオンは之れを止めて「夫人よ、擔夫を敬せられよ」と語りながら、自ら道を避けて他に去つたと云ふことである。又、米の大統領ワシントンが、常に勞働を尊び、一日重荷を積みて曳き行く車力の後押されたと云ふのは、一世の美談となつて居る。斯くの如く、世に偉人と稱せらるゝ人は、勞働を賤まざるのみならず、自ら進んで之を實踐したのである。かくてこそ勞働は神聖なりと云ふことが出来るのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月二十七日

人は自ら善行を練習し、勉めて誘惑に抵抗すべし、此の如くして徳義を習癖とならしめば、久しき後は、善を爲すこと、悪に陥るよりも易かるべし。 (バツテル)

習慣は同一の徳を固く守るに必要なのみでなく、又其の行状を變化せしむるにも必要である。されば人は常に警め省みて悪習に染まぬやうにするがよい、それは人の品行と云ふものは一度悪に負ければ、一度弱くなり、久しき後でなくば、舊に復することの六づかしいものである。されば吾人は常に能く習慣を慎み、悪習慣に陥らぬやうに心掛けねばならぬ。



十一月二十八日

恥の死せる人は、即ち身の死したる人なり。

(ブラチエス)

恥を知る者は、多少の過失も自ら悔ひて善に遷るのであるけれども、恥を知らぬものは、自ら悔ゆる心を生せぬから、遂に善に遷るの途を失ふて仕舞ふのである。古來廉恥心と云ふことの必要を唱へられるのは、全く之が爲めである。されば吾人は之を修養して一には善に進み、一には悪を避くるやうにせねばならぬのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十一月二十九日

緑なる一つの草ぞと春は見し

秋は色々花の咲くらん。

(古今集)

實に青年は、春は孰れも一樣なる一つ緑の草である。誰も彼れも差別なき若者なるが、聽て秋に至り、花の咲く頃となれば色々赤い花ともなり、黄なる色ともなり、様々の色彩を呈出するのである如く、人も若い青年期の修養如何に依つて、晩年の花を千差萬別ならしむるものである。されば成るも成らざるも青年期の修養一つに在ることである。



十一月三十日

窮鬼は、精勤、熱心にして一事に全力を傾注して他を顧みざる人の家には入らず。

(フランクリン)

熱心精勵の念を以て一事を全力を傾注しつゝ、ある人は、自己の經營する所をして早く大成を期せしむるのみならず、又實に、多數の人々よりして、尊重畏敬の念を拂はれ、無限の信任を措かしむるに足るのである。蓋し、精力集注は成功を生むの要素であることを斷言す。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月一日

人生に於ける成功の秘訣は、機會の到る時に際して之に準備し得べき才幹ある人に屬するなり。

(ベンジャミン、チスレリー)

現代の青年は機會の到來するに對して、之が準備のならざるのみか、機會の來るを見て始めて、自ら驚き、如何はせんかと狼狽の餘り、僅に準備に着手するものにして、宛然、盗人を捕へて始めて繩を縛ふの愚を學ばざるはないのである。斯くの如き人物にして、如何でか最良の機會を活用して、將來の爲めに自己開拓上の發揮を期することは爲し能はざる所である。



十二月二日

丸くとも少しは角のあれや人

あまり丸きは轉び易けれ。

(古 諺)

人の信を博するは堅硬なる見識を有して、人と相争ふを辭せざるにあり、勿論、堅硬の見識を有するものは、社會の或部に容れられざることあるべく、又、人と争ふが爲に、人と交を絶つこともあるべし。然れども、斯くの如くして、社會の一部に容れられず、又交を絶つとも決して悲しむべきことではないのである。何となれば、一方に於て斯かる事に於て敵を作るものは、必ず、又他方に於て自己を厚遇し、自己を信用する者を有するが爲めである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月三日

泰山は土壤を譲らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇ばず、故に能く其の深きを就す。(李 斯)

元來我が國民は敏捷輕快であるが大度を缺き、活潑であるが寛量に乏しき憾みがある。即ち敏捷であるから、事物を處断するに快速で、活潑輕快であるから果敢決行の美點はあるけれども、輕卒妄舉に陥り、重厚の氣風を失ひ、激し易く熱し易く、冷め易く變り易くして、質實剛健の氣象を缺き、局量偏狹に傾くを免れぬのである。されば諸士は寛量大度の徳性を作り、以て大國民たるに恥ざるやうにせねばならぬ。



十二月四日

人は皆各々職業を持つて生る。

(ローウエル)

人は其の好む業務でなければ、全精力を傾注することも出来ぬもので、又其の職業に愉快をも感じない。愉快を感じなければ人は其の業務に熱注することは不可能である、加之も大なる自己の運命開展は出来ないものである。されば持つて生れたる職業を撰擇、自覺すべきである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月五日

勉強は功成の材料なり。

(ドンキゾー)

天才は未だ磨かぬ寶石である。その固有の光輝に發揮せしめ
んには、必ずや勞苦を忍びて之を研磨しなければならぬ、寶石
も磨かざれば瓦石と同じく、天才も勞苦を経ざれば凡才に異な
らぬのである。勞苦、辛酸等を嘗めてこそ、天才たるの眞價を
發揮し得るものである。蓋し成功の材は強勉に在るとは吾人を
欺かざるものである。



十二月六日

富を致すには別に秘訣なし、只心掛くべきは己の事業に注
意し、他人の機先を制するに在り。

(バンダーピント)

拔群の商才を有する彼等は、生れながらにして寶の山、富の
庫を開くの鍵を授けられて居る。然も彼等は此の鍵を利用して
其の山其の庫を開き、能く巨額の富を掴み出す資格を有して居
るのである。

されど此の鍵は、刻苦精勵を経なければ利用は出来ない。世
には天より此の鍵を、授けられながら怠惰のために終生之を利
用することが出来ずして、窮死するものは尠くないのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月七日

白雲のよそに求むな世の人の

まことの道を敷島のみち。

(明治天皇)

至誠は天の道であつて、人倫の大本である。即ち至誠なるが故に廉潔であり公明であり正大である。忠孝も、恭敬も、友愛も、義勇も、皆至誠の發現せるものである。實に至誠は敷島の天地を一貫せる我が大道である。



十二月八日

廊廟の材は一本の枝にあらず。

(漢書)

家康、關ヶ原合戦に打勝ちて歸陣の上、諸大名と顔合せのことがあつた時に、諸家の諸勇士を引見したのである。其の時福島正則の老臣、福島丹波、小關石見、長尾隼人の三人も引見された。然るに此の三勇士は三人共不具者であつた。先づ丹波は跛、石見は片眼、隼人はいぐちであつた。されば三人の御前に出るや、小姓衆は之を見て、異形をなせる人のみなれば、思はず失笑したのである。然るに家康は之を見て甚だしく立腹し、戒めて曰く「男子不具なりと雖も見苦しからず、心の功成るこそ本意なれ。彼等三人は人の人参なり、骨を煎じて汝等服用す

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

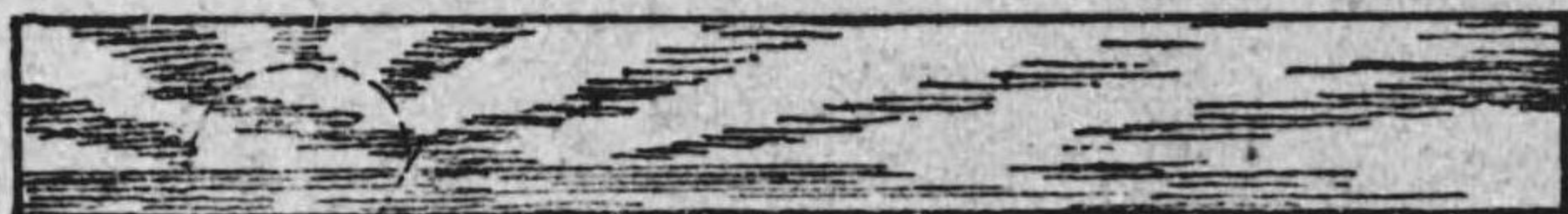
べし』と云ひければ、一同顔色なかりしと。

十二月九日

成る堪忍は誰もする、

成らぬ堪忍するが誠の堪忍。(俚 諺)

宋の富弼、未だ若い時に、人々が大變罵つたけれども、自身は聞き取れざる風にて意にも介せず居たるに、他の友人が富弼に向つて「汝を罵るにあらずや」と富弼曰く「他人を罵るにあらずや、世間豈に余と同名の人なきを得ず、敢て余の關知せざる所なり」と、罵りたる人之を聞きて、大に愧じ再びせぬやうになつたのであるが、富弼は後に、名聲赫々たる大將軍となつたのである。



十二月十日

満足する人は常に富めり。

(羅甸の諺)

希臘の大賢「デモステース」一日太陽に面して暖を取つて居たのである。所が歴山大王たまく到りて、禮を厚くし辭を卑くして曰く「卿若し、世に望む所あらんか、朕必ず力めて卿の意を満たしむべし」と「デモステース」漫然答へて曰く「王去れ予が暖を取るを妨げずんば、予が願足れり」と。

一日一訓を守れ



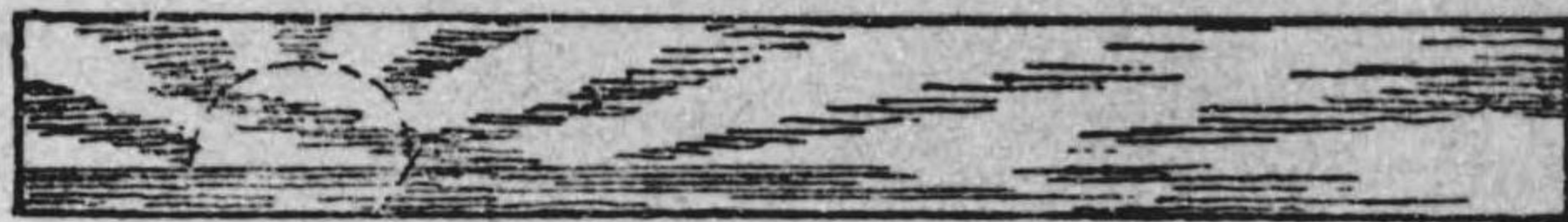
一日一訓を守れ

十二月十一日

偃鼠河に飲むも、満腹に過ぎず。

(莊子)

木村蓬萊名は貞貫と云へり、少き時家貧しくして、常に十日の食もなかつたのである。然るに若し、流氓の飢えて食を乞ふものあれば、必ず米櫃を傾け盡して之を興へたと云ふ、人が其の何故なるやを問へば「予に明日の食なきも、飢に泣く心痛なし」と答へたとのことであつた。



十二月十二日

人を鋭敏ならしむるは、缺乏に如くはなし。

(フヂン)

左甚五郎、彫刻術の名家にして古今獨歩の技倆を有じて居たのであるが、彼、金あつて酒の飲める間は、決して彫刀を持たず、然れども、金が無く酒が飲めざるとなるや、奮然、稼ぎ出して他人の十日も要する仕事を、僅か一晝夜で仕上ぐることは珍しくないであつた、されば缺乏が、人をして鋭敏ならしむる、鞭なりとは、蓋し斯かる人に適切なる格言と云ふべし。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月十三日

他人の忠言を用ゐざる者は誤り易し、之を智者と謂ふべからず。

(ベン、ジョンソン)

關白秀次、六角義郷に謂て曰く人皆物忘れすることを患ふれども、予は幸にも記憶よくして其の患ひなしと、義郷、儼然、形を正して曰く「尊命蓋し然らず、殿下位人臣を極め、天下の重きを負ふの人なるに、今や天下の蒼生を忘る、是れ猶ほ人の父母にして、その子を忘る、が如し、物忘れ是れより大なるはなし」と、憚る色なく直言したるに、秀次、大に恥ぢて後に至り義郷を深く徳としたとのことである。



十二月十四日

君は元首たり、臣は股肱たり、體を同じうして相俟つて共に美德を成す。

(後漢書)

歴山大王の兵を將ひて亞細亞を征するや、途たまく曠原を過ぐ、然るに其の地土質礮角にして、涓滴の濁を療すべきものない爲めに、全軍大いに之れに苦しんだのである。王、兵を遣はして水を搜索せしめたるに、たまく巖石の間に泉源あるを見て、之れを甕に盈てかへつて王に献じたのであつた、王、之を持つて自ら軍中に示して曰はく「水源遠からず、士氣を損ずる勿れ」と、王は其の水を飲まずに、却つて地上に投じて更に曰く「余の渴するも、士卒の渴するも、渴に於ては一なり、我豈獨り飲むに忍びんや」と。全軍之を聞いて感奮し、爲めに喝

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

を忘るゝに至つたと云ふことである。

十二月十五日

寒を救ふは、喪を重ぬるに若くはなし、謗りを止むるは自ら修むるに若くはなし。(古諺)

尾藤二洲、常に門人を戒めて曰く「一事一業を成就せんと欲せば、勉めて飲食、男女の慾を抑へざるべからず、予と雖も、木石にあらざれば、壯年の頃は、迷ひの雲に耳目を蔽はれんとせしこともありし、されど我が身は幼少より跛にて、世間の誹謗や世人の言葉に恐れ、此等の慾念も失せて、精神一に學問に集注し、身の行ひも修まり、學業も大いに進みたり」と。以て吾人の箴となすべきにあらすや。



十二月十六日

勞作は身體を教養し、學習は心靈を教養す。

(スマイルス)

山崎闇齋の始めて江戸に入りて惟を垂れて教授するや、更に入門して教へを乞ふものなく、止むを得ず筆耕して、以て糊口を爲すに至つたのである、隣人某之を氣の毒に思ひ、内藤侯に参候の時、之を侯に告げしかば、侯はその操守を悦ばれ、某を介して、闇齋に來邸講解せんことを求められたのであつた。闇齋之れを聞いて心甚だ悦ばず。云つて曰く「來り學ぶことは聞けども、往いて教ゆることを聞かず」と、侯之を聞かれて、益々其の人と爲りを敬慕して、遂に自から闇齋を訪ふて、教へを受けたとのことである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月十七日

朽ちたる木は彫るべからず、糞土の牆は朽るべからず。

(論語)

古賀精里先生、門人の晝寝せるを見、諸生を戒めて曰く「孔子は、宰予の晝寝せるを見られ、朽ちたる木は彫るべからず糞土の牆は朽るべからずと言はれたり、宰予の如き人にして尙ほ斯くの如く見捨てられたりすれば、諸子にして彼が如き油断あらば、夫子捨てられたりすれば、諸子にして彼が如き油断あらば、夫子は之れを何と評せられんか、むかし仁齊先生大石良雄の講義を聞いて坐眠せる状を見、痛くその賢を稱されしと云ふ、諸子も願はくば良雄の如くなれ、決して宰予の如くなること勿れ」と諭されたとの事であるが、又以て他山の石と爲し好材なるべし



十二月十八日

子供ならば遊べよ、笑へよ、騒げよ、されど嘘を吐く勿れ少壯にして心身健全ならば、多大の希望を抱いて世に出でよ。然れども空想の犠牲となる勿れ、先づ勤勉を愛せよ。故に必ず一つ職業を執れ。

人の成功に對しては、個人の努力、奮闘、力行の除外しては到底求め得べからず。如何程熟慮を凝らし、如何程頭腦を勞するとも、勞力なる絶好の代價を支拂はずしては、何物をも慾求し能はざるは、蓋し動すべからざる一大真理である。然り、徒らに空想にのみ耽り、些の奮闘をも顧みぬやうでは、將來の事斷じて成功しないのである。

一日一訓を守れ

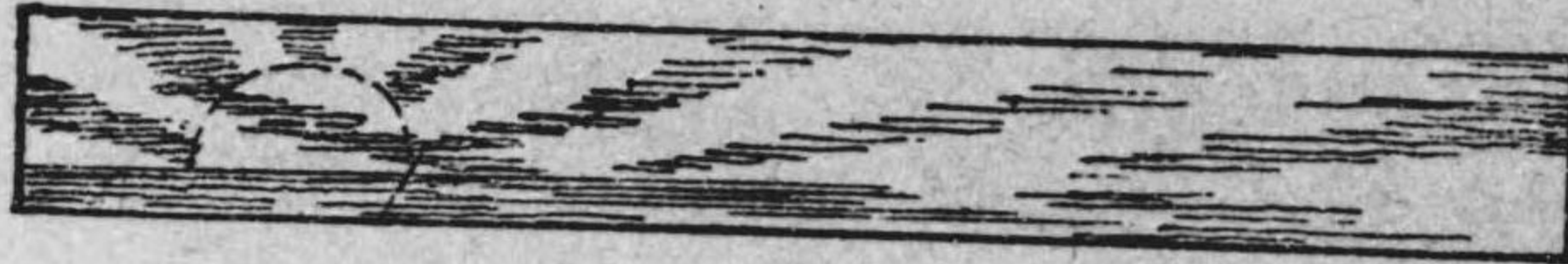


一日一訓を守れ

十二月十九日

人生の回轉期と云ふは、過去の練習を歸結する時である。たとへ不意の出來事でも、常に用意して之を利用しやうと準備して居る人には、決して怖るべきものではない。
(アーノルド)

將來のよき夢に耽つて、現在の事實を忘却する者は、天ばかり望んでゐて溝に落ちた希臘の天文學者を笑へぬ筈である。尊いのは現在である。注意すべきは現在である。過去は現在の爲に鑑むべきものである。將來は現在から發生して來るものである。故に現在は總ての中心點であることを思はざる可からず。



十二月二十日

書籍を熟讀する時間程面白く且つ幸福なるはなし。

(ゼームス、シナリー)

吾等を慰藉し、吾等は薰陶して、其の憂苦を去り、悲痛を除くもの、讀書の如きはないのである。多くの娯樂は對手を要するけれども、讀書の快は獨り之を擅にすべく、多くの娯樂は所を擇ぶけれども、讀書の樂は車上たると、机上たると、枕上たると、室内たると、戶外たるとを問はず、月洩る伏屋の軒にも一卷の書を以て吾等に無限の快樂と幸福とを與ふるものである

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月二十一日

富貴も亂する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此れ是れを大丈夫と云ふ。

(孔子)

戦士に具足の用意を必要とする如く、奮闘の健兒も、忍耐、克己、眞勇等を身に纏ひ、以て世路の難關に向ふべし。青年にして此等の用意と準備とを缺くものがあつたならば、夫は遂に敗者として長へに暗黒界に呻吟せざるを得ないのである。



十二月二十二日

古池や蛙飛び込む水の音

(芭蕉)

空前絶後の名吟とし、嘖々措かざる所のものは、畢竟禪の靜中動の妙旨を喝破したるに由るものである。要言すれば、古池やは、寂動不動の状態であつて、蛙飛び込む水の音は、活動生氣の眞趣である。蛙の飛び込む後と雖も、古池は依然として古池である。生れぬ先きの父母の戀しきは、生れし後と雖も異なる所はないのであるまいか。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月二十三日

勝利の最も重んずべき種類は己れに克にあり。

(古 諺)

多数の青年が今日迷路に彷徨しつつあるのは自己を知らぬ故である。従つて己れを制する力を缺くことである。古人は己に克は一城一市を抜くよりも大なりと云つて居る。青年が若し第一に己を制して己れに克つことを學ばなければ、人生の戦場に如何にして名譽ある勝利を得ることが出来やうか。己を知り、己に克つと云ふことは、再三再四繰返へす言葉ではあるが、吾人の生涯を通じて最も勢力あるものの一つであるのである。



十二月二十四日

成功とは常識、勇氣、精力、及び能力を積算したる結果を云ふなり。

(ルーズベルト)

昔の人は、頂上には空室があつて、何人でも勤勉さへすれば之れに登ることが出来ると云ふが、是は今日でも少しも異ならぬのである。即ち、青年の進むべき路は多々にして、且つ廣狭大小各自の面前に展開せられてあるのである。要するに前提の言は其の眞理を示したるものである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月二十五日

男らしき品性を具へよ。

(ジョンソン)

「男で御座る」の一言の中には、昔は無限の力を含蓄して居たものである。胸に消し難き一團の炎が燃え、身に冷め難き一脈の熱血が迸る時、口を衝いて出づる言葉は、即ち「男でござる」の一語である。然るに今の青年には、斯うした緊張した、強みのある、屈しない気分は、薬にしたくも見當らぬのである。斯くて青年の衿持は凋落せんとしつ、あるのである。養ふべきは、吾人青年の男らしき品性である。



十二月二十六日

糞土を厭ふ者は良農となる能はず。

(吉田松蔭)

糞土に觸るるは即ち農夫の洗禮をうくるのである。「受附」となるは即ち實業家の洗禮をうくるのである。此く考へ來らば大學の卒業生が受附となりたりとて毫も愧づべき所以を見ず、何となれば彼れは、之に依りてその志望とする人生の行路に一步を轉じたからである。即ち將來大實業と推賞せらるる聲の一端はこの「受附」にあるのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月二十七日

憤らざれば啓かず。

(孔子)

教育は啓發を尙ぶものである。詰め込み主義は、勞して効のないものにて、憤や、悻は誠ありて煩悶するのである。前者は心に關し、後者は言に關するものにして、憤を待ちて之を啓き悻を待ちて之を發するのである之れ即ち啓發の意茲に全ふし得るのである。



十二月二十八日

蛇の道は蛇。

(日本俚諺)

我國今日に於て要求する所の「正直」は、愚直ならざる明直の人でなければならぬのである。正直なれども克く觀察の眼識を具へ他の姦策に係はらざる明智を有たねばならぬ。蛇の道を知るは、何ぞ蛇のみに限らんや、蛇の狡智よりも、敏捷なる人の明察を以て、社會の妍醜を鑑別するの常識を有すること文明國民たる眞の正直と云はねばならぬのである。

一日一訓を守れ



一日一訓を守れ

十二月二十九日

禹湯は己を罪して其の興るや勃然たり、桀紂は人を罪して其の亡ぶるや忽焉たり。

(左 傳)

吾人は自己を視ると同じく、自國を視るにも偏見を有す、自國を視るには盲にして他の外國を視るには明目を有し、毛を吹いて疵を求むるの癖がある。國の盛衰興亡の岐るる所も亦茲に存するを思ふべきである。



十二月三十日

人一度にして之を能くせば、己れ之を百たびし、人十たびにして之を能くせば、己れ千たびも之を能くせば果して斯の道を能くせん。

(中 庸)

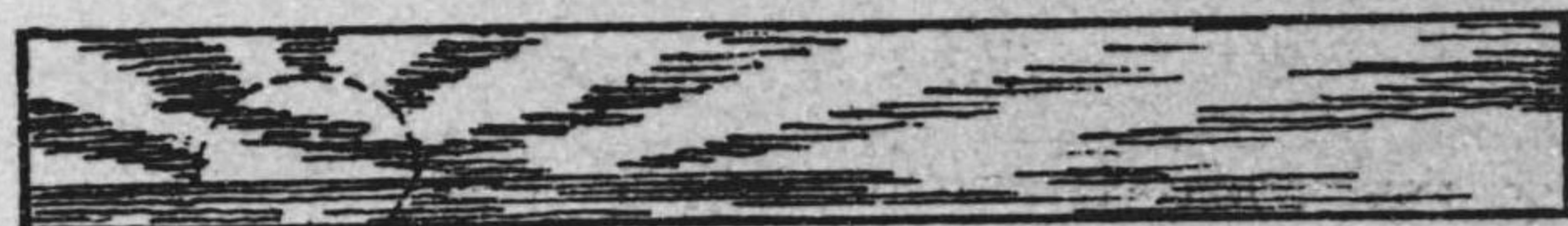
忍耐は信仰の保護者で、又平和の維持者である。忍耐は征服者の勇氣である。人の運命に對抗する徳である。一人にして能く天下を敵とし、心靈を以て物質に反抗する徳である。社會の發達改善を促す福音である。忍耐ある者は成功し、忍耐なきものは失敗す。失望の裡にあつても働き続けよ。最も大なる成功は、最も多くの困難を征服して得たものである。最も光榮ある功名は最も激烈なる鬭争に勝ち得たるものである。

一日一訓を守れ

十二月三十一日

貧は羞づるに足らず、羞づべきは是れ貧にして志なきなり
賤は惡むに足らず。惡むべきは是れ賤にして能なきなり。
老は歎するに足らず。歎すべきは是れ老いて虚しく生くる
なり。死は悲しむに足らず、悲しむべきは是れ死して聞ゆ
るなきなり。(呂 坤)

古來偉大なる人物は、必ずしも名門の出でない。否、其の總
べての偉人は、名もなき貧窮兒である。是れ何が故に、さうで
あらうか。思ふに名門富豪の子弟は、生活の煩なく、徒らに安
逸を貪り、更に向上心が缺けて居るからである。之れに反して
貧窮兒は何うであるか、薄命兒は何うであるかと云ふに、彼等



の腦中には、常に向上邁進せんとするの念慮が満ち充ちて、片
時も、之を忘れないのである。随つて、之に支拂らふ所の困苦
缺乏の如きは眼中にない。何物を犠牲に供してもと奮起するの
である。之れ即ち最後の勝利者となり榮冠を贏ち得る人である

——(終)——

昭和十年四月十日印刷
昭和十年四月二十日發行

定價五拾錢

不許複製

編輯者 青年修養社

著作權所有 松浦忠次

印刷者 西川正太郎

發行所

大阪市浪速區元町二丁目

宏元社書店

振替 大阪五七七二番
電話 戎五四六二番

？る來時常非家國 ？る來 年五三九一
年六三九一

ぐ告に君諸年青の代現

煙紫てに一エフカし更を夜にスンタ
すらあに季時る戯と給女てに中るた々猛

れ作を神精本日てい破讀を書本づ先

集全養修時常非

- 修養偉人は語る
- 我等の進むべき道
- 次の時代に立つ人
- 多望多幸なる青年へ
- 一日一訓を守れ
- 新時代の青年に告ぐ
- 日本精神と修養
- 成功は最後の一步
- 先づ自己を見よ
- 國民としての修養

頁〇〇四 入箱版六四 冊各

(錢十五金冊各價定)

